贖罪生誕祭／Ｒ１８Ｇ男性向けカニバリズム

とどろきめぐる

この作品はR18描写を含むため、18歳未満の方は閲覧禁止です。

HinaProject Inc.

注意事項

このＰＤＦファイルは小説家になろうグループサイトで掲載中の作品をＰＤＦ化したものです。
このＰＤＦファイルおよび作品の取り扱いについては、小説家になろう利用規約が適用されます。そのため、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止いたします。作品の紹介や個人用途での印刷および保存にはご自由にお使いください。

【作品タイトル】
贖罪生誕祭／Ｒ１８Ｇ男性向けカニバリズム

【Ｎコード】
Ｎ１３９０ＧＯ

【作者名】
とどろきめぐる

【あらすじ】
小説コミッションです。
テーマは「カニバリズム」。
砂原秋穂は監禁された。理由はわからない。だが、料理長と、四人の客には確かな目的があるようだ。近付く刃、繰り返す痛み、秋穂は彼らから逃げ切れるのか――。
含まれる要素／削ぎ、切断、調理、食人、小スカ、嘔吐など。
ご依頼はｈｔｔｐｓ：／／ｔｏｄｏｒｏｋｉｍｅｇｕｒｕ．ｊｉｍｄｏｆｒｅｅ．ｃｏｍ／まで。

（前書き）

小説コミッションです。
テーマは「カニバリズム」。
砂原秋穂は監禁された。理由はわからない。だが、料理長と、四人の客には確かな目的があるようだ。近付く刃、繰り返す痛み、秋穂は彼らから逃げ切れるのか――。
含まれる要素／削ぎ、切断、調理、食人、小スカ、嘔吐など。
ご依頼はｈｔｔｐｓ：／／ｔｏｄｏｒｏｋｉｍｅｇｕｒｕ．ｊｐｍｄｏｆｒｅｅ．ｃｏｍ／まで。

「あなたは監禁されています。なにか、心当たりはございませんか？」

塞がれた視界。ぽっと灯る光のように、その一言が砂原秋穂（さはらあきほ）の耳介に入り込んだ。

ひどく頭痛がする。悪い夢でも見ているのだろうか。秋穂は答えるでもなく、口をぼんやり開いた。換気扇が回る、ブーンという低い音だけがしばらく続く。気のせいかも知れないが、秋穂の周囲には複数の、押し殺したような呼吸音があった。やけにリアルで、不快感だけが募っていく。夢なら覚めて欲しい。そう考えていると、すぐ側で再び声がした。

「あなたは監禁されています。なにか、心当たりはございませんか？」

確かめるように、一字一句、同じ文言だ。秋穂は仕方なく、意識を尖らせる。

――監禁、心当たり……。

記憶を遡ろう。

覚えているのは、自宅への近道として人通りの少ない裏路地に侵入したこと。時刻は――午後十一時――大学時代からの縁で、今年からデザイン事務所で働いている――残業でひどく疲れてはいたが――帰路へと向かう足は弾んでいた。

思い出そうとすると、ジンジンと頭が痛む。

――そうだ、後頭部を強い力で殴打されたのだ――意識を失う寸前まで、明るい気持ちで満たされていた――思い出した。

本日、十月十四日は、砂原秋穂（さはらあきほ）の二十三回目の誕生日である。

ひとつ年上の婚約者、瀬尾誠（せおまこと）が、同棲を始めたばかりの３ＬＤＫで手料理を用意して待っている約束だ。付き合いは大学時代からで、先に卒業した彼は、大学近くの大阪本社に就職した。一年経ち、無事に秋穂の卒業が決まった頃、彼の広島支店への異動が決定。広島は瀬尾誠の故郷である。秋穂は彼と共に、大阪から引っ越した。今現在、お互いの両親への挨拶は済ませており、婚約という形で、結婚までの甘い時間を過ごしている段階だ。

順風満帆。つまり『現在』に落ち度はない。

それなら、と、秋穂は『過去』を思った。両親の仲は昔から良好で、金銭的にも不自由せず、近所付き合いにも軋轢はない。秋穂自身に問題があるのかといえば、親友と呼べる友人が複数いることから可能性は少ないだろう。確かに、生きていく上での小さな悩みやトラブルはある。だが、誰かに監禁されるほど恨まれる理由はひとつとして思い当たらない。

秋穂は押し黙った。

「……ないようですね」

鼓膜を撫でる、低く、人工的な声。その声色には明らかな落胆が含まれており、秋穂の心は一瞬で不安に晒された。

――ある、と言うべきだったのだろうか。

声の主はそうして、秋穂の目元を覆い隠していたアイマスクを取り払った。

まず、目に飛び込んできたのはアクリル製の透明板だ。
頭上にぶら下がる巨大なシャンデリアの光を反射して、やけに眩しい。何度か瞬きをして焦点を合わせると、その先に、深紅の緞帳が壁一面を覆っているのが見えた。
人間が複数、座っている。
彼らは示し合わせたように黒いドレス、または黒いタキシードを着用しており、それらが性別ごとに区分されているのだとしたら、左から男、女、女、男の人数、して四人である。彼らは統一して、目元から鼻にかけてを黒いレースで覆い隠しており、唯一、口元だけが輝くように露出していた。
中央から右の若い女がコーヒーカップに口をつけ、喉を静かに上下させる。見えているのかいないのか、彼女以外はみな、緩やかな視線を秋穂に投げかけていた。
秋穂はそのとき、ようやく自らが裸体であることに気付いた。
見れば、女性器を覆っていたはずの陰毛が一本残らず剃毛されている。腕や足の産毛もだ。その肌の生白さに、身体の底から急速に危機感が込み上げてきた。
立ち上がろうと足に力を入れたが、ぴくりとも動かない。鉄製の椅子に、結束バンドで四肢を固定されているのだった。

「お伝えしましたように、あなたは監禁されているのです、砂原秋穂さん」

悪夢の中で二度呼びかけられた、低く加工された音声。ボイスチェンジャーだろうか。秋穂は勢いよく、左側を見た。
すぐ側で、黒い存在が佇んでいた。
比喩ではない。顔面を不透明な黒いフェイスシールドで覆い、横から見えないようにとの配慮なのか、厳重にも、その下にマスクまで着用している。頭にはコック帽、胴体にはコックスーツ、手袋、

長靴。それらみな真っ黒で、コックらしからぬ異様な出で立ちであった。秋穂の引きつった顔がフェイスシールドに反射する。

「本日、調理を担当させていただきます、カフェモカと申します」

少し声を張るだけで、ジジと音割れする、耳障りな音声だ。カフェモカは「みなさんは『料理長』としか呼んでくれませんが」と残念そうに言葉を次いだ。

「君の勧める飲み物は肉に合わないからね」

ヤジを飛ばしたのは、一番右側に座る、細身の男であった。上唇に立派にたくわえたカイゼル髭の端を指先でしごきながら「カップを下げてくれ。食前酒をいただこう」と白い歯を見せる。カフェモカ――もとい料理長は自分の背後に控える部下たちに指示を出した。同じように黒い見た目をした六人の部下たちが、全員のカップを引き取り、秋穂から見て左側奥にあつらえられた大きな厨房に向かう。

――どうして、厨房なんてあるんだろう。

赤い緞帳に囲まれた四方、人物は黒に覆われ、床と厨房だけが無機質な鉛色をしている。そこに一人だけ、真っ白な肌を晒した秋穂が拘束されているのだから、誰が弱者か、一目瞭然だ。秋穂は身震いした。

四人のワイングラスに、それぞれ色が違う食前酒が注ぎ込まれる。「乾杯」の合図で、彼らはグラスを傾けた。ゆったりとした時間が過ぎる。秋穂の震えは、次第に大きくなっていく。

「砂原秋穂（さはらあきほ）さん、でしたね」

口を開いたのは、左端の男だ。名を呼ばれ、秋穂の肩がびくりと持ち上がった。

軽く百キロは超えているだろう。顔の上半分を隠していても、膨らんだ頬とたるんだ顎が彼の肥満を隠さない。

「わたしは『ミスター』、その隣が『マダム』、『マリア』、そして『カイゼル』です」

紹介されると、該当の人物はみな嬉しそうに口角をあげた。雰囲気をそのままネーミングしたといわんばかりに、それぞれの容姿にぴったりの名前である。ミスターとマダムが年長者で、カイゼルが一世代下だろうか。唯一、マリアだけが、全身からみなぎるような若さを放っている。恐らく二十代前半、尖った八重歯を見せながら「よろしくね」と微笑んだ。

左端のミスターが言葉を続ける。

「我々は『眼球倶楽部』。バタイユの『眼球譚（がんきゅうたん）』のような超越的な刺激と、谷崎の『美食倶楽部』の未知なる存在への探究心を旨に、性と食、その両方を求めて設立した会です」

ときには両手を広げ、演説でもするかのようにミスターは秋穂へ向けて言葉を尽くす。

曰（いわ）く、設立初日には全員でセックスをしながら牛の睾丸を食べ、性器にそれを詰めて遊んだ。珍味を食らい、昆虫を食らい、ありとあらゆるジビエに手を出し、ときには贅を尽くした高級料理に舌鼓を打つこともあった。なにかを『食う』たびに、性的行為に励んだが、性器と性器をこすり合わせるだけのセックスにはすぐに飽きてしまった。それでも、貪るように、スカトロジー、獣姦、屍姦……さらなる刺激を求めたが、尖ったものというのは、得てしてすぐに先端が丸くなり、鈍化してしまう。やがて、我々は性に固執するこ

とをやめた――。

「興味は性よりも『食』に移ろいでいきました。食べる、ということは実に奥が深い。手で触れ、臭いを嗅ぎ、舌を這わせ、噛み砕く。食道を通る、淫靡な感覚もたまりません。そうして胃に落ちた食材は、じわり、じわりと胃液に溶かされ、全身の血管へと行き渡る――どうでしょう、我々が飽きないよう、神々が用意した娯楽にすら思えませんか」

うんうんと頷いていたカイゼルが、ミスターの言葉尻を取った。

「俺たちはなによりも慣れを嫌っている。新しく、斬新で、あっと驚くような感覚に襲われ続けたい。そのために、今日はお前に、食材になってもらう」

左腕に違和感を感じた。視線をそちらに移動する。料理長の手によって、秋穂の左腕にぴったりと沿わされたのは――ピーラーだ。野菜などの皮を剥くピーラー、それが、刃を下にして、肘の付け根に置かれている。

「――えっ」

疑問の声を発したと同時に、勢いよくそれが手首までスライドした。

秋穂は叫んだ。咄嗟のことに、頭が混乱している。一寸遅れて、強烈な痛みが皮膚表面を走った。三ミリくらいの深さで、かつ二十センチほどの長さの表皮が豪快に削げ、露出した部分にプツプツと赤い血が滲み始める。ただただ、絶叫することしかできない。

「良い声ね」

マダムが、黒い口紅で縁取った唇を湾曲させながら嬉しそうに言った。料理長は、部下の持つ銀トレイに採取したばかりの細長い皮膚をタラリと落とし「新鮮な証拠です」と頷く。

「どうしましょう。薄造りですから、カリッと素揚げして、スナック感覚で塩を合わせましょうか」

「いや、まずは生で食べさせてくれ」

口を挟んだのはカイゼルだ。

「初めて味わう肉を油で揚げちまうのはよくない。せっかくの鮮度なんだ。手づかみでいかせてもらう」

承知しました、と料理長が部下に合図を出す。カイゼルは他の三人よりも味にうるさいようだ。塩もなにも要らないぞ、と念押ししながら到着を待つ。

彼の眼前に、フィンガーボウルと、秋穂の皮膚が乗った銀トレイが置かれた。カイゼルはおもむろにそれを三本の指で摘まむと、全員が見守る中、まずは鼻を近付けて臭いを嗅ぐ。

「ふむ、恐怖で発汗したのか。純粋な血の匂いに混じって、ややツンとした刺激臭がある。洗浄してこれなら、体臭は強いと見た。俺好みだ」

小さく頷き、口内に放り込んだ。口うるさいが咀嚼は静かで、実にスマートな所作である。顎を動かし、うんうんと頷きながら呟き始める。

「……舌触りはなめらかだ。それに……うん、肉自体に、弾力があ

って……二十三という年齢を全く感じさせない。十は若い質感だぞ。ミルキーですらある」

カイゼルの褒めっぷりに他三人は大いに沸いた。その中でも、最年少マリアの食いつきは凄まじいものだ。椅子から立ち上がり「マリアも！　マリアも食べる！」とまるで児童のように駄々をこねる。ミスターとマダムは「わたしもいただこう」「アタシも」と便乗する形ではあったが、肉への興味は傍目から見ても明らかだった。

料理長は喜んだ。

「それでは、人数分ご用意いたしましょう。付け合わせに、オーガニック野菜をふんだんに使ったサラダはどうですか」

眼球倶楽部の面々が頷き、部下たちが厨房に向かった。料理長といえば「クルリと巻いて食べると、生春巻きのようで美味しいでしょうね」などと客たちにお勧めしながら、再びピーラーを秋穂の左腕に沿わせた。

「いやっ、やめてっ、やめてっ」

なにも聞こえなかったかのように、料理長は秋穂の、まだ皮膚が残っている場所を狙って、サッ、サッ、と手際よく削いでいった。秋穂は再び絶叫した。ガタガタと身体を震わせ、それでもびくともしない鉄製の椅子に怒り、髪を振り乱して抵抗する。

しかし、連続した動作は留まることを知らず、血の滴る皮膚は無残にも銀トレイの上で次々と折り重なっていく。

秋穂は顔面を、涙と唾液でグショグショに濡らした。拘束に使われている結束バンドが四肢に食い込み、青く鬱血している。肝心の左腕といえば、肘から手首にかけての全ての皮膚が削がれ、鉄の椅子は血液と浸出液でベトベトに侵されていた。

「なんでっ……なんでこんなことっ！　なんの恨みがあってっ！　こんなっ！」

ほとんど言葉になっていなかった。それでも、秋穂は問いかけたかった。なにが理由で、皮付き野菜を手早く処理するように、腕の表皮を落とされ続けたのか。料理長は「大丈夫、秋穂さんが不安に思うことはありません」と、優しい口調で秋穂をなだめる。

「あなたが目覚めるまでに、しっかりと下準備はしておきました。ご存じ、産毛の一本に至るまで首から下の毛は全て剃毛しましたし、全身もくまなく食用アルコールで洗浄いたしました。安心してお客さまに提供できますよ」

生産者としての不安などこれっぽっちも感じていない秋穂は、相手がわざと的を外して答えているのか、それともこちらを煽るためにそう言っているのか判断できなかった。ただ、恐怖は倍増した。同じ言語を話しているはずなのに、どこか別の国の言葉を操られているかのようだ。

たまらず大声を出す。そんな秋穂に、料理長は小首を傾げ、懇切丁寧に言葉を重ねる。

「綺麗にしたのは、なにも、外部だけじゃありません。秋穂さんの肛門にホースを挿入し、粘膜が痛まない程度に何度も浣腸して腸内物を除去しました。肉の臭みが幾分か軽減されたはずです。本来なら逆さ吊りにして放血、肛門を縛り、内臓を抜いて、と、手順通りに処理したいのですが、今回はお客様のご希望で――」

「いやあああああっ！　もういや！　放して！　近付かないでっ！」

「ふふ、話が長くてごめんなさい。私の悪い癖です。左腕が終わりましたから、右腕の皮膚も剥いでいきましょう」

物わかりの悪い子供に対するような口調で言うと、料理長はまだ血の一滴も流れていない右腕にピーラーを沿わせ始めた。再び、躊躇いもなく、簡単な動作が繰り返される。あまりにも料理人然とした手つきだ。

「ひっ！　ひいっ！　やめっ、やめてっ！　ひっ！」

気付けば、秋穂は失禁していた。股の間に設置された銀ボウルに、バチャバチャと派手な音を立てて、暖かい尿が溜まっていく。

右腕の皮膚を削ぎ落とし終わった料理長はピーラーをサイドテーブルに直しながら「尿をご希望のかた」とアクリル板の向こうに座る眼球倶楽部の面々に呼びかけた。

手をあげたのは、ミスターだ。

料理長の部下が、尿が並々注ぎ込まれた銀ボウルを手に、彼の元へと向かう。

「黄色すぎない、フレッシュな色合いですね」

ミスターは、部下がそれをワイングラスに注ぎ込もうとしたのを制し、直接ボウルを受け取った。両手で大事そうに掴むと、ゴクゴクと豪快に喉を鳴らして飲み干していく。秋穂はただ、血まみれになった両腕をそのままに、それを見ていた。

ミスターがボウルから顔を離す。顎と唇は、秋穂の尿で濡れていた。口元に満面の笑みを浮かべながら「やはり恐怖を帯びた尿が一番美味しいです」感想を述べる。

「中国由来の桃娘（タオニャン）も試しましたが、甘ったるいだけで、喉にこべりついていけない。対して、こちらはさっぱりとした喉ごしの良い味わいです。これならいくらでも飲めます」

「俺にもくれ、美味そうだ」

カイゼルの食いつきに、ミスターは照れくさそうに「すみません。一滴残らず、腹の中です」と大きな腹を叩いてみせる。横で聞いていたマダムとマリアが「また、おしっこしてもらわなきゃ」と笑い、料理長も加工した低い音声でハハハと同調した。

部屋中に、弛緩した空気が漂う。

緊張し続けているのは秋穂だけだ。

「助けてください」

気付けば、口から言葉が溢れ出していた。

「助けてください。ごめんなさい。謝りますから、助けて、助けてください」

堰を切ったように次々と命乞いの言葉がこぼれる。

秋穂は文字通り、痛感していた。自身が監禁された世界が、一般的な価値観が通用しないことを。人が人を食う以前に、非常識が常識として運用されている。彼らは圧倒的なマジョリティで、秋穂はただ従うことしか許されていない。

――できることといえば、命乞いくらいだ。

「助けてください……お願いします……お願いします……」

ボタボタと止めどなく涙をこぼしながら、秋穂は必死に懇願し続けた。脳裏に浮かぶのは、家で待つ婚約者、瀬尾誠の姿だ。柔らかい笑顔で、大学時代のときには意識して使わなかったらしい広島訛りで話す、その姿がただ愛おしい。監禁されていなければ今ごろ、

誠の手料理を囲みながら、二十三回目の誕生日を祝っていたことだろう。

「死にたくない……家に帰りたい……」

料理長は「あなた、助かりたいんですか」と素っ頓狂な質問をしてみせる。黒いフェイスシールドに、絶望を浮かべた秋穂の顔が映り込んだ。

「助かりたいに決まってるじゃない……っ！」

「ずいぶん、乱暴な言いかたですね」

「お願いしますっ！　早くっ、私を解放してくださいっ！」

――無理だ。私はきっと、殺されて、この異常者どもに食べられてしまう。

しかし、予想とは裏腹に、料理長は「わかりました」と言って小さく頷いた。秋穂は驚き、思わず脱力してしまいそうになった。が、やはり現実は甘くない。料理長はアクリル板に跳ねた秋穂の血液をティッシュで拭い落としながら「代わりの食材を差し出してください」と言ってのけた。

「代わりって……」

「そのままの意味です。誰かひとり、生きている人間を、秋穂さんの代わりに差し出してください。そうすれば、あなたを解放しましょう。ご家族、友人、どなたでも構いません。ご指名くだされば私どもが必ず、その相手を生け捕りにします」

老人だけは避けてくれ、あまり食感が良くない、と、カイゼルが楽しそうに言う。同調して、他三人も「若ければ若いほど良いわ」

と注文をつけた。
咄嗟に、秋穂の脳内に、四人の親友の顔が浮かんだ。
志摩結衣、北島美羽、鏑木夏実、大野友加里――。

大学の四年間をほとんど一緒に過ごした仲である。
大人しい性分の秋穂とは違い、四人はとにかく明るかった。地元もそれぞれ違って、美羽だけが産まれも育ちも大阪である。共通点は少ないはずなのに、不思議と入学当初から気が合った。親兄弟よりも、五人で過ごす時間のほうが多かっただろう。
そのため、秋穂が広島に引っ越すと決めたとき、彼女たちは大いに悲しんだ。
秋穂の裾を引きながら、結衣、夏実、友加里は、美羽から習った大阪弁で「行かんといて」とわんわん泣いた。秋穂も彼女らと離れるのは辛く、子供のように泣いた。それでも、現婚約者との仲を知っている彼女らは秋穂を快く広島へと送り出した。
『来年の夏は絶対、みんなで広島旅行だからね』と約束の連絡がきたのも最近のことだ。

――誰かを、私の身代わりに……。

親友たちの顔が、浮かんでは消え、浮かんでは消えた。連想してはいけないとわかっていても、意識すればするほど、彼女たちの優しい笑顔が強く思い起こされる。

――結衣は最近、好きな人とくっついたって言ってたし、夏実も友加里も付き合いの長い彼氏がいる。美羽だって、気になる人ができた、って嬉しそうな顔で報告してくれた。恋に仕事に忙しいあの子たちの人生を、私の代わりに潰してしまって良いわけが――。

「ちなみに、あなたを身代わりに差し出したのは、志摩結衣（しまゆい）という女性です」

秋穂は目を見開いた。

「心当たりはございますか？」

眼球倶楽部の誰かがフフと息をこぼす。

心当たりはございますか、と料理長が二度目の問いかけをした。

その口ぶりは、完全に秋穂を揶揄するものであり、眼球倶楽部の四人も、全てを承知で、親友に裏切られた秋穂を笑っているのだった。

秋穂は志摩結衣のことを思った。長い手足に快活な性格。バスケが趣味で、それが全身に現れている。贅肉がつきやすい秋穂にとって彼女は憧れで、暇さえあればダイエットの相談に乗ってもらっていた。お互いがお互いを『親友』と呼び合う仲だ。少なくとも、秋穂は結衣が大好きだった――。

料理長は「さあ、どうしましょう」と両手を広げる。フェイスシールドの下では、きっと満面の笑みを浮かべていることだろう。

「身代わりとして、他人を指名するのは、一度きりです。名前を告げたら、取り消せません。もちろん、指名を止め、秋穂さんがこのまま食材になることも可能です。よく、考えてください」

秋穂の中に、どろどろとしたものが渦巻く。

彼氏ができたばかりの結衣をおもんばかって、彼女を身代わりにすることを躊躇った。しかし、当の結衣は、秋穂が婚約したばかりだと知った上で、こちらを指名してきたのである。自分自身の甘さを痛感させられた気分だ。秋穂は下唇を噛んだ。

ふと、天恵のような思いつきがあった。

「指名者を、指名しても良いの」

声に出してしまうと、なんて素晴らしい発想だと自分を賛美したくなる。

そうだ、しっぺ返しを食らわせてやるのだ。

「志摩結衣さんを身代わりに、逆指名するのは可能か、ということですか」

料理長の問いかけに、秋穂は大きく頷いた。

「もちろん、それは構いません。しかし条件があって、結衣さんと――」

どうせ、結衣と話し合えとでも言うのだろう。秋穂は「今すぐ結衣を連れてきて！」料理長の話を遮った。

「もう指名したでしょ！　食うなら結衣を食って！　私を解放して！」

また誰かが、フフと笑った。換気扇の回る、ブーンという音がやけに大きく感じられる。

「わかりました。実は、そうおっしゃると思って、結衣さんを『保管しておいた』んです」

持ってきてください、と料理長が部下に指示を出す。

椅子に拘束された秋穂は、全てに疑問符をつけたまま成り行きを見つめた。

ガラガラと音を立てて現れたのは、台車に乗せられた、全裸の結衣である。

秋穂はあんぐりと口を開け、見下ろすように彼女の全身に視線をやった。

目を閉じ、胎児が眠るように丸くなった結衣。その身体には乾いた血がこべりつき、何カ所か肉がえぐり取られた痕跡がある。見れば、右耳が根元からすっかりなくなっていた。断面はまだジュクジュクと膿んだようになっていて、思わず目を背ける。

「志摩結衣さん、起きてください。あなたは今から食材です」

ピーラーを持った料理長が、彼女の露出した太ももを素早く削いだ。ギャッと声がして、結衣が飛び起きる。焦点の合わない目で周囲を見回し、ようやく秋穂の姿をみとめたとき、明らかに彼女は動揺していた。

「秋穂!?　なんでっ……」

「結衣こそ、どうして広島に……？」

聞きたいことは山ほどあったが、大阪にいるはずの結衣が広島にいる、それがまずおかしかった。この厨房をあつらえた大きな部屋が広島にしか存在しない、とか――いや、ただ監禁して食うだけなら、大阪でもできることだろう。秋穂の問いかけに、結衣の顔がみるみる青ざめていく。

「秋穂の男と、セックスしてたんだよ、結衣」

話し始めたのは眼球倶楽部、最年少のマリアだ。八重歯を光らせながら「秋穂が残業で遅いのわかってたから、約束して、時間まで

ハメ狂ってたの」と追い打ちをかける。秋穂にとっては青天の霹靂だ。

「ねえ、今の話……本当？」

声が震えてしまう。嘘なら嘘と、はっきり言って欲しい。しかし結衣は「本当よ」とだけ言った。

「……もう、全部話すわ。どうせいつかバレるんだし」

結衣は台車の上で、露出した身体を隠そうともせず、秋穂の目をしっかりと見つめて話し始める。その瞳には、覚悟のような色があった。

「あたし、就職先が決まるの早かったじゃない。第一志望の、大阪本社ね。すごく嬉しくて……だから、あの人、広島への異動、言い出せなかったんだってさ」

「あの人って」

「誠に決まってるでしょ。あんたの婚約者、瀬尾誠。実家のある広島までついてきてくれる子と付き合いたかった、って言われて、一旦関係が終わったの。……知ってたら、あたしだって広島で就職先探したのに」

秋穂は絶句した。結衣と誠に交際関係があったこともそうだが、合理的な考えで自分が選ばれたことがショックだったのだ。誠は秋穂に対して「真面目なところが好きだ」と言って告白してきた。秋穂も、彼の誠実なところが好きだった。

「あたし、悔しくって。考え直して欲しいって、何度も誠にお願いしたわ。広島に通ってね。最初は誠も困ってたけど、すぐにあたし

を受け入れてくれた。その証拠に、今日だって、秋穂の誕生日なのに、会ってセックスしてくれたのよ」

そこで一旦言葉を切って、フンと鼻を鳴らした。

「誠から誘ってきたの。わかる？　あんたに振る舞う予定の手料理だって、出来合のを買って、皿に詰め直しただけ。それも、あたしが手伝った」

結衣は勝ち誇ったような表情で秋穂を見る。

どう言葉を返せば良いのかわからなかった。秋穂は確かに、誕生日当日は残業でなかなか帰れないことを誠に事前に伝えていた。それを逆手に取り、誠は結衣との逢瀬の時間を作り出したのだ。秋穂には、彼がどうしてこのような行動に出たのか、思い当たる節がある。

「あんたさ、まだ処女なんでしょ？」

頭の中を覗かれたような気分だった。結衣が「だからよ」と笑う。砂原秋穂は、二十三歳を迎えてもなお処女であった。男性と付き合ったことは複数あるが、どうしても性的な雰囲気を察知すると怖じ気づいてしまう。理由はわからないが、身体が拒絶してしまい、吐き気が込み上げてくるのだ。

「誠が言ってたわ。おっぱいの持ち腐れだって。本当にそう。Ｆカップなんてふざけた胸してんのに、それがお飾りなんて、可哀想にね」

処女である秋穂に対して「いつまでも待つよ」と誠は言っていた。セックスだけが全てじゃないから、と。

嘘だったのだろう。結衣の肉体を求めたのは、きっと性欲が溜まっていたからだ。瀬尾誠は出会った当初から人に好かれる好人物で、とにかく人付き合いが良く、女性から言い寄られることも多かった。どうして秋穂に告白しようなど思い立ったのか腑に落ちなかったが、今、合点がいった。

広島についてきてくれる、おっぱいの大きい女、が秋穂の価値だったのだ。

「……でも、誠は、私と婚約してくれた、両親にだって挨拶したわ。良い子だって、言ってもらえて……」

「だから！　あたしが広島に行けば、あんたの代わりにあたしが婚約してたのよ！　ただの運！　勘違いしないで！」

「もう！　どっちでも良いから早く食べさせてよ！　マリア、お腹空いた！」

大きな音がして、秋穂と結衣はビクリと肩を揺らした。マリアが下唇を突き出し、机を叩きながら不満を露わにしている。他の眼球倶楽部の面々も、口をへの字に曲げて退屈そうに話し始めた。

「このつまらないショーは、いつまで続くのでしょうか」

「俺の腹の虫は、皮膚を数枚食ったくらいじゃおさまらない」

「早く始めてちょうだい。逆指名した場合は『供物（くもつ）ゲーム』を行う約束でしょう」

マダムは確かに『供物ゲーム』と言った。秋穂と結衣の頭の中で、その単語はやけに嫌な響きに聞こえる。表情に表れていたのだろう、料理長が二人の顔を交互に覗き込み「先ほど、秋穂さんに説明しようとしたのがそのゲームについてです」と解説する。

「逆指名した場合の特別ルールですね。ただ食材にするだけではつ

まらない、とのことで、エンターテイメント性を追加することにしました。これは私の案ではなく、眼球倶楽部、みなさんのご要望です」

料理長の隣に、部下たちがなにやら大きな機械を押しながら近付いてくる。縦横、ゆうに二メートルはあった。全体に赤い布がかけられ、全貌は不明だ。機械が完全にアクリル板よりこちら側に入り込んだとき、部下のひとりが赤い布を引いた。

登場したのは、中央に巨大な丸ノコが取り付けられた切断機である。通電と同時に、甲高い音を立てながら高速で刃が回転した。結衣の肩が震えているのが、秋穂から見えた。

「簡単に説明いたしましょう。供物ゲームとは、自らの肉体を、この切断機で切り落とし『食材として』お客さまに捧げると、相手の身体の一部を選択し『食材として』お客さまに提供する権利が得られます」

あまりにも意味不明なルールだった。しかし、料理長の説明は水のようにスラスラと流れ出る。

「切る部位は、どれほど小さくても一箇所として換算します。例えば指の第一関節のみでも大丈夫です。可食部が減るので眼球倶楽部のみなさんからはブーイングが起こるかも知れませんが、一箇所は一箇所。相手の部位を指定する権利が一回、発生します。指定につきましては、足でもなんでも、大きい場所を狙ってくださって構いません。

ただ、自らが切る部位と、指定する部位には、急所が設定されています。前者は『餞（ハナムケ）』、切り落とした途端、勝者となり、相手を一発で食材にすることができます。対して後者は『贄（ニエ）』、指定した途端、自らが一発で食材になってしまいます」

「そ、そんな……わけわかんないゲーム、するわけないじゃない！」

抵抗の声を発したのは結衣だ。その声はひどく震えており、本能から怯えていることが傍目から見てもわかる。秋穂はといえば、あまりの恐怖から、発言することもできなかった。

「『わけわかんない』……ですか」

料理長は、サイドテーブルに手を伸ばした。規則正しく並んだ調理器具の中からピーラーを手に取り、戻し、肉包丁、きり、鉗子（かんし）などを、なぞるように触った。金属の触れ合う神経質な音が部屋に響く。

「しかし、あなたがたの親友である、北島美羽（みう）さん、鏑木（かぶらぎ）夏実さん、大野友加里さんの三名は、ゲームに参加してくださいましたよ」

頭を鈍器で殴られたかのような衝撃が、秋穂と結衣を襲った。

「抵抗すればどうなるか、見せしめとして友加里さんの首を落としたのが効果的だったのでしょう」

マダムの声がアクリル板の向こうから投げかけられる。

「記念写真、みんなで撮ったのよ。見せてあげるわ」

そう言って、嬉しそうにハンドバッグを探り始めた。

秋穂と結衣は、ぼうっとした様子で料理長に視線を送る。このときばかりは、二人とも同じ感情であった。共通の『親友』が彼らと接触していたのだ。無事に済むわけがない――。

「経緯を説明しましょう。一番最初に、鏑木夏実さんのお知り合いが、夏実さんを指名しました。夏実さんは、美羽さんを身代わりに指名。私どもは美羽さんを捕まえようとしたのですが、友加里さんとずっと行動を共にしており、ひとりだけさらうのが困難でした。食材は多ければ多いほど良いですから、美羽さんと友加里さんを同時に生け捕りにしました。夏実さんが美羽さんを指名した経緯を伝えると、お二人とも声を揃えて夏実さんを逆指名したので、三人が一同に会することになったのです」

マダムから部下伝いに受け取った一枚の写真を、料理長はそのまま、秋穂と結衣の前に提示した。

見たくもないのに見なくてはいけないような不可抗力があった。

二人は顔を近付ける。

反射的に込み上げるものがあり、咄嗟に口を手のひらで覆ったが間に合わない。おえええっと声を発しながら二人は床に嘔吐した。

カイゼルが「もったいない、吐くならボウルの中にしろ」と不満げに言う。

写真に映し出されていたのは、生きている人間が四人と、死んでいる人間が三人。

中央に、折り重なるように倒れているのが美羽、夏実、友加里の三人だろう。三人とも血まみれで、境界線すらあやうくなっているが、明らかに、あるはずの場所に手足がなく、鼻がなく、唇がなかった。突き出ているのは、誰かの骨だろうか。いったい、どのようにすればここまで肉体がぐちゃぐちゃになるのかわからない。友加里に至っては、料理長の言葉通り、胴体から切断された首が、こちらを向いたまま置かれていた。

「カメラマンは私が務めさせていただきました。みなさん、楽しそうに映っているでしょう」

三人の死体とは裏腹に、眼球倶楽部の四人はカメラに向かってピースサインを送っている。全員の口角が上がっていることから、楽しんでいるのは一目瞭然だ。

マリアが立ち上がり、アクリル板のすぐ側まで近付いて「見せしめに友加里の首を取ったあと、すぐに美羽が切断機に走ったの」と八重歯を見せる。

「美羽と夏実は、景気よくマリアたちに肉を捧げてくれたんだけど、美羽が『贄』になったと思ったら、今度は夏実が出血多量で死んじゃった。せっかく勝てたのにね」

「ちゃんと止血は施していたんですよ。でも、欠損箇所が多くて、間に合いませんでした」

「マリアたち、みんな大食いだから、まあいっか、ってムシャムシャ食べ尽くしたの」

あまりにも凄惨な顛末に、秋穂は呆然とした。あれだけ大学時代を共にしたはずの仲間が、もうこの世にいない――。しかも目の前の四人に文字通り食べられてしまったとは。全くもって、秋穂にはその事実が受け入れられなかった。

結衣も同じ気持ちだろう。そう思い、秋穂は視線を横に移動した。しかし結衣は、どこか鋭い表情で、じっと黙り込んでいる。

「死亡した三人の所持品を探り、共通の友人を選び出しました。それが志摩結衣さん、あなたです。あなたは秋穂さんを指名し、秋穂さんは――ふふっ、これ以上、説明する必要はありませんね」

料理長が部下に合図をする。部下たちは秋穂の座る鉄製の椅子に近付き、パチパチと小気味良い音を立てて結束バンドを切った。解放される四肢。

「とにもかくにも、はじめてしまいましょう。これ以上、お客さまを待たせるわけにはいきません」

眼球倶楽部の面々が湧いた。早くしろ、と楽しそうにヤジを飛ばす。

「先制攻撃をしかけたほうが、圧倒的に有利なゲームです。さあ、スタートです！」

ロケットさながら、勢いよく切断機へと走り出したのは結衣だった。

秋穂はただただ狼狽した。まさか、なんの躊躇いもなく、飛び込んでいくとは思わなかったのだ。

結衣の表情は鋭いままだ。なにせ、秋穂に対して『誠を奪われた』恨みがある。『誠を奪い返したい』という目的もある。すでに全身の肉をうがつようにえぐられ、右耳を切除されている彼女にとって『指を切断すること』は勇気さえあれば可能な事柄であった。

機械の前に駆けつけた結衣が叫んだ。

「切るところは小さくても構わないんでしょ！」

料理長が追いつき、すぐ側に寄り添う。

「ええ、全く構いません。ただし、レアリティが低そうなところは『餞（ハナムケ）』は狙いにくいですよ。餞は一発勝者の箇所ですからね」

「そんなもの、鼻から狙ってないわ。あたしが狙ってるのは、あいつのバカ乳を奪うことっ」

なるほど、と料理長が頷いた。

「もし結衣さんが小さな箇所――『指』を捧げるおつもりでしたら、二本、切断する必要があります。乳房は右と左、二箇所で換算しますから」
「わかった！　わかったわよっ！」
「このタオルを噛みしめてください。そのままでは、奥歯が砕けてしまいます」

目の前では、丸ノコが高速で回り続けている。
料理長に手渡されたタオルを口に含んだ結衣は、左手の人差し指と中指を、右手で掴んでグイと引き延ばした。

「ううううううううううう」

結衣の、くぐもった唸り声が聞こえる。指の付け根を刃先に近付けようとするが、身体が拒絶して一向に進まないのだ。
そのとき、料理長が「手伝って差し上げましょう」と優しく結衣の二本の指を掴んだ。他の指を巻き込まないよう、しっかり曲げて避けるように指示をする。
二本の指と、刃先の距離が、縮まっていく。
秋穂はぎゅっと目をつむった。とてもじゃないが、見ていられない。刃が回転する甲高い音が一瞬、鈍い音になった。結衣の悲鳴。次いで、客たちの歓声がワッと立ち上がる。

――切ったのだ、指を、二本。

「指は、爪を剥がす手間があるだけで、鶏の手羽中と調理方法が同じです。塩胡椒で炒めましょうか。それともハーブソルトに柑橘を合わせて――」
「どうでもいい！　早く！　早く秋穂のバカ乳を取ってっ！」

結衣の金切り声が鼓膜を震わせた。噛みしめていたタオルが床に落ちる。

目を開けるよりも早く、部下たちが秋穂の四肢を強い力で拘束した。秋穂は泣いて暴れた。しかし、やはり少しも自由はない。大の字に広げられた秋穂の身体。そこにぶら下がる露出した豊満な乳房を、料理長が左右から観察した。右乳房を下からすくうように持ち上げると、サイドテーブルに用意したメスを手に取り、胴体と乳房の境界線に刃を沿わせる。

ぷつ、と、肌に切っ先が沈み込んだ。

「いやあああああっ」

熱した棒を押し付けられたような痛みが、グングンと近付いてくる。料理長は何度も刃先を滑らせ、剥離させるように切り進めていく。脂肪が刃に絡まるのか、ときおりコックコートで拭うシーンもあった。それでも、あっという間に右乳房は切除された。部下の用意した銀トレイに、ボトンと大きな質量となって載せられる。

「ああっ……ああっ……」

豊満な左乳房に対して、平らになった右乳房の跡地は、あまりにも無残なものだ。

「採取した右乳房は一口大にカットして、砂糖、醤油、酒、みりんでシンプルに煮込み料理にいたします。人間の乳房は、豚や牛のチチカブとほとんど同じ食感ですから、意外と油っぽくなくて、あっさりいただくことができます。そう思うと、やはり人間も動物の一種ですね」

露出した切断面から血液が際限なく垂れ落ちた。それを部下が手

慣れた仕草でボウルに集めている。

「血液は、ゼラチンで固めて食後のデザートにいたしましょう。となると、デザート飾りが必要です」

間髪入れず、料理長は秋穂の左乳首をキュッと摘まんだ。コリコリと感触を楽しむように揉むと、小さく頷き、サイドテーブルに用意した鉗子を手に取る。ハサミのような持ち手で、先端が、挟むことに特化した形状になっていた。

料理長は鉗子で左乳首を挟み、少し引っ張った。その根元にメスの刃を沿わせる。緊張しきった秋穂の乳首は、硬く勃起していた。じっと秋穂を観察する料理長。なぜか、少しの沈黙のあと「やっぱり、ハサミで切りましょう」とメスを置いた。おもむろにハサミを手に取る。

どうしてそんな選択をしたのだろう。答えはすぐにわかった。メスより切れ味が悪いからだ。勃起した乳首の根元を刃先で挟み込むと、ぎゅうと押し出されるようにして乳頭が前に突き出る。料理長は、弄ぶように数回それを繰り返す。

「ひっ、ひっ」

秋穂は喘いだ。

切断にはかなりの力を有するようだ。ようやく、ジャキンと大きな音がした。

奥歯を噛みしめ、天を仰ぐ。

完全に削げた右乳房と、乳首だけを失った左乳房。痛みと、アンバランスになった自身の身体に、秋穂は失神寸前である。

「さて、デザートについてはこれで準備オーケーです。血液も人数分採取できましたから、左乳房を落としきるよりも先に、止血をお

こないましょう。いま、厨房から持ってこさせます」

部下たちが厨房から持ってきたのは、端から見てもわかるくらいに高温に熱された焼きごてである。大人の掌くらいの大きさだ。秋穂は激しく首を横に振って抵抗を示した。無駄だった。

乳首を失い、肉だけが残った左乳房に、部下たちは熱心にスパイスを塗り込んだ。乳首切断面に走る痛み。絶叫する秋穂を見て小さく頷き合い、ひとまず完全に削ぎ落とされた右乳房に、ゆっくりと焼きごてを近付けていく。

秋穂はガクガクと奥歯を鳴らし、その瞬間まで抵抗し続けた。そうして、熱で赤々と光った先端が切断面に押しつけられたとき。ジューと小気味良い音が部屋中に響き渡り、露出していた切断面の血液が急速に蒸発した。同時に、筋肉が熱で収縮していく。あくまで止血目的のため、深部まで焼き切る必要はない。それでも、通常の精神では受け止めきれないほどのとてつもない痛みに、秋穂は背が折れそうなほど大きく仰け反って耐えた。

焼きごてが離れていく。室内に充満する香ばしい香り。眼球倶楽部の面々はうっとりした様子で期待の声を投げた。料理長が頷く。

「本当に、食欲をそそる良い香りですね。さ、今度は左乳房を焼きましょう」

乳首を失っただけの、まだ立体的な膨らみが残る左乳房。先ほど、部下たちの手によってスパイスが念入りに塗り込まれた箇所だ。

「こちらは止血目的ではありませんから、しっかりと火を通していきます」

秋穂を拘束している部下が、その背をグイと押した。さらに仰け反り、自らが迎えるような形で、焼きごてが左乳房に押し付けられ

る。

再び聞こえる、肉の焼ける音。

誰かが「シュラスコ？」と料理長に問いかける。塩胡椒で炒めた結衣の指を、手づかみで食べているマダムだった。はい、と料理長が嬉しそうに答える。

焼きごては、やや執拗なくらい、何度も何度も秋穂の左乳房を焼き固めていく。そのたび、秋穂はほどんど引きつけに近いような荒い呼吸を繰り返した。舌を出し、少しでも熱さを体外に排出しようと無意識に身体が反応している。

逃げ出せるのなら今すぐ逃げ出したい。しかし、今の秋穂は、手足を固定され、自由を根こそぎ奪われている。苦痛を受け止めるだけの器でしかない。

「良いですね、綺麗に焼き上がりました」

丁寧な調理の甲斐あって、皮膚が少しも剥がれることなく仕上がった。おおよそミディアムといった具合だろうか。料理長は満足そうに頷き、調理を進行する。

秋穂は担がれるような体勢で、すぐに眼球倶楽部の前へと運ばれた。

料理長や眼球倶楽部の面々からすれば『食べ頃』だが、秋穂からすれば重度の火傷だ。浅い呼吸を繰り返していると、患部に、ナイフの切っ先が入り込んだ。秋穂はヒュッと息を吸い込む。料理長が持つのは、シュラスコ専用の、手首のスナップが利きやすい小型のナイフである。部下のひとりが、左乳房の下に銀トレイを持って待ち受ける。

ピーラーで皮膚を剥くときとは違い、肉を削ぐのは力が必要だ。それでも料理長は手慣れた様子で、軽快に乳房の肉を削り落としていく。

「食べやすいサイズで提供させていただきますね」

宣言通り、それぞれの皿に向けてペロン、ペロンと、焼き上がったばかりの『乳房シュラスコ』が順番に配られていく。最初にそれを口にしたのはミスターだ。奥歯で噛みしめ、ふむふむと頷いてから「美味い！」大きく声を張り上げる。

「この子は乳房が大きいから、大味じゃないかと心配していましたが、実に杞憂でした。肉質は繊細、乳房独特のミルキーな味わいも濃厚で、やや酸味の効いたスパイスと良い具合にマッチしています」

マダムも追いかけるように頬張った。咀嚼する口を片手で隠しながら「あら、本当ね」と共感した。カイゼルとマリアが「俺もくれ」「マリアもマリアも」うるさく催促し始める。

「どんどん切っていきますから、ご安心ください」

五ミリほどの厚さで丁寧にスライスされていく秋穂の左乳房。そうしてある程度、削ぎ落とすと、火の通っていない赤い肉が現れた。すぐさま部下がコテで焼き締め、色合い良く焦がす。料理長が、再び乳房を削いでいく。

ナイフが肉を剥離するたびに、鮮やかな苦痛が秋穂を襲った。叫び続けるせいで喉が嗄れ、血の味がにじむ。それなのに声は、身体の奥底から湯水のように沸いて出る。涙もそうだ。

秋穂は思った。感情も感覚もない人形になれたら、どれほど幸せだろうか。

――結衣。結衣が全ての元凶だ。私から幸せを取り上げ、不幸のどん底に突き落とした。あいつさえいなければ……。

秋穂の左乳房は根元まで削ぎ落とされてしまった。あっという間に、肉が眼球倶楽部の胃の中へと消える。大きな笑い声が聞こえたのはそのときだ。

秋穂は下唇を噛んだ。視界の端で、失った左の人差し指で秋穂を指差しながら、結衣が狂喜の声をあげている。

「バカ乳のないあんたなんか、ただのバカ！　これで誠はあんたなんか好きにならない！　やった！　やった！」

痛いやら、悲しいやら、秋穂はもう、頭が怒りでいっぱいだ。

――なにもかも、こいつのせいだ。こいつが私を指名したせいで……こいつが、こいつが……。

秋穂は爆発した。

「私をこんな目にあわせてっ！　殺してやるっ！」

部下の拘束を振りほどこうと暴れ回る。許せない。絶対に許せない。

料理長は部下に指示を出し、泣いて暴れる秋穂を再びアクリル板の向こうへ連れて行く。真っ平らになった左乳房に、止血の焼きごてが押しつけられた。秋穂は奥歯を噛みしめ、痛みに震える。料理長が顔を覗き込んだ。

「だめですよ、相手を直接殺す権利は、今の秋穂さんにはありません。ルールをもう一度説明します。まずは自分の肉を我々に捧げてください。そうすれば、あなたは、結衣さんと同じように相手の肉を指定する権利が得られる。そういうゲームです」

怒りは、止血の痛みで塗り替えられてしまった。秋穂は視線を下へ移動した。Fカップあった乳房が、完全に削げてなくなっている。得られたのは、引き攣るように残ったひどい火傷だけだ。

秋穂は床にうずくまり、ウウウと獣さながら唸った。この場を打開するには、やはり自分の身体を食材として捧げなければならない。でも、どこを？

手足をばっさりいくなんてとてもじゃないが考えられない。

――指の先なら、いけるかも。

思考が、口から漏れていたらしい。料理長が秋穂の顔の正面で「わかりました。指の先ですね」と頷いた。全身から血の気が引いていく。

「ち、違うの、いけるかも、って言っただけで、私はっ」

「秋穂さんならきっとできます。さあ、こちらへ」

秋穂は部下たちに羽交い締めにされ、強制的に切断機の元へと引きずられた。高速で回転する刃を前に、急速に腰から力が抜けてしまう。ほとんど体重を預けるようにしながら「無理です」と声を震わせる。

「無理なことなど、秋穂さんにはなにひとつございません。なにごとも、まずはチャレンジ。案外、やってみればあっけないものですよ」

どの指を捧げるんですか、と料理長は物腰の柔らかい口調で問いかける。

「一番、負担が少ないのはやはり利き手とは逆の手の小指です。そ

もそも小指は、労災でも後遺障害等級の一番低い箇所ですから、切ったとて大きく生活に支障のあるものではございません。痛みだって、乳房を削ぎ落とされ、焼きごてを押しつけられることに比べればほとんど無痛でしょう」

確かに小指は、乳房に比べて直線距離が短い。骨を断つことへの不安はあるが、我慢するのは一瞬で済みそうだ。結衣が左手の人差し指と中指を切断したときですら、あっという間だった。

「小指を落とせば、どこでも、結衣さんの身体を指定できるんです。こういうときは、物事をポジティブに考えたほうが秋穂さんのためです」

すぐ側でとつとつと語られると、確かに料理長の言葉はもっともな気がした。気付けば、秋穂は首を縦に振っていた。

「素晴らしい判断ですね。さ、他の四本の指を傷つけないよう、手のひら側に曲げて親指で握り込んでください」

料理長の言葉に従い、小指を突き出すようにして他の指を折り曲げた。

「しっかりと奥歯で、タオルを噛んでください。頑張りましょうね、秋穂さん」

秋穂はタオルを咥える。これから行うことへの恐怖心がないと言ったら、もちろん嘘になる。だが、たったこれだけの代償で、大きな見返りが望めるのだとしたら――。

料理長は結衣にしたときのように、秋穂の小指をゆっくり掴んだ。丸ノコの刃を中央に、左右に二人が立つ。

「いきますよ」

とてつもない痛みだった。刃が皮膚を裂き、肉を切り進むときも痛かったが、特に、中心を通る骨に差し掛かった途端、ガガガガと鈍い音が身体全体に響いた。料理長は、引っ込めようとした秋穂の手を強い力で掴み、刃に押しつけるようにして力を加えていく。骨さえ切れてしまえば、あとは、あっという間だった。

「あああああああああああああああああああああ」

タオルを吐き捨てた口から、勝手に声が出た。痛みとか、喪失感とか、後悔とか、そういったものが、ない交ぜになって身体から放出されているのだ。しかし、秋穂の精神には、わずかにも希望のようなものが光っていた。

――結衣を身体を『食材』にする権利を得たのだ。

絶望の中に灯った光は、意識すればするほど輝いて見える。秋穂は思考を回転させた。

――足なら、相手の機動を奪えるだろう。でも、自分に思い付くようなことは、誰だって一番最初に考えつくはずだ。つまり、足こそが、一発で食材行きの『贄』の箇所である可能性が高い。

舌を指定すれば出血死を狙えるかも――とまで考えて、秋穂は、自分がとんでもない残酷な思考になっていることに気付いた。少し前までは、親友を身代わりにすることすら躊躇っていたはずだ。それが、今となっては、その親友の一人だったはずの結衣を殺すことばかり考えている。秋穂は自分自身が怖くなった。

――だめだ。せめて、腕を落とそう。それも利き腕ではないほうだ。左腕なら、足ほど機動を奪えるわけじゃない。つまりレアリティが低い、『贄』である可能性も低い。

「結衣の左腕を指定するわ。肩の付け根から手首まで。『お客さま』に捧げて」

秋穂の言葉に、眼球倶楽部の面々が手を叩いて喜んだ。

「やった！　結衣の腕、美味しそうだなって思ってたの！」
「スポーツをしていたんだってな」
「バスケットボールだそうですよ」
「あら、引き締まった味が期待できるわね」

登場したのは、大型のミンチ機である。
部下たちに取り押さえられた結衣は、左腕だけを料理長に向けて献上するように突き出して固定された。料理長はサイドテーブルから、シュラスコに使ったナイフよりも大型のナイフを取り、結衣の左肩口に刃先を沿える。

「離せっ！　離せえっ！　っうぎっ、ゃあああああっ！」

実にリズミカルな仕草だった。派手に出血しないよう、手のひら側の太い血管を残し、かつ中央を通る上腕骨に触れるか触れないかの程度で、ザクザクと大きく肉を削いでいく。
上半分が終わると、今度は下半分だ。橈骨と尺骨周りの肉を残し、同じように刃先を滑らせていく。
削いだ肉は、すぐさまミンチ機へ。モーター音と共に、ネリネリと脂肪混じりの肉が端から捻出されていった。血液混じりの、華や

かなピンク色である。

「たっぷり取れましたね。こちらは少し肉を休ませて、あとでハンバーグにしましょう」

厨房にはガラス張りの大きなオーブンがあるが、そちらではなく、魚グリル用で焼くように、と料理長は部下に言付ける。

「もうっ！　あたしの指っ！　全部あげるわ！　殺せっ！　あいつを殺せえええええっ！」

結衣は正気を失った。頭を上下に振りながら、何度も何度も「殺せ」と懇願している。

それもそのはずだ。必要な肉が削ぎ落とされた結衣の左腕は、肩口から手首にかけて、ほとんど骨スレスレの痩せ細った見た目となっていた。先端では、人差し指と薬指を失った左手のひらがブラブラ揺れている。

「殺せっ！　殺せっ！」

肉とともに精神さえも削ぎ落とされたようだ。結衣は繰り返した。

「殺せっ！　殺せえええええっ」

しかし、相変わらず料理長の答えは簡素なものである。使ったナイフをサイドテーブルに直しながら「まずは自分の肉を捧げることが、このゲームのルールです」と言ってのける。

結衣は、部下たちの拘束から解放された途端、爆発するように切断機へと走り出した。

すぐに大きな音がして、追いついた料理長が、様子を見て笑う。

「五本ですから、五箇所指定ですね」

残念ながらどの箇所も『餞』ではありません、と、ついでに呟いた。秋穂は「ごかしょ」飲み込みきれない言葉をただただ発する。部下たちが淡々とした仕草で、結衣が切断したばかりの右の五指を銀トレイに並べた。

「五箇所指定となると『贄』を選んでしまう可能性がグンと高くなりました。数を削ることは許可していません。どうします？」

「もう決めてるのっ！　両脚とまんこっ！　絶対ぜったい、むしり取って欲しいっ」

秋穂は思わず「両脚！？」と叫んでしまった。両脚を選ぶのはあまりにリスキー過ぎる。しかし、それを聞いた料理長は特に言及することなく「わかりました」とだけ言った。秋穂は驚いた。

――両脚は『贄』じゃないんだ。それに、まんこも。

まんこ。秋穂はハッとした。結衣が女性器を指定したことがようやく理解できたのだ。

「いっ……いやっ……嫌よ、そんなっ……」

秋穂は狼狽えたが、結衣は構わず、あと二箇所をどこにするか悩んでいる。ミスターが「眼球が食べたい気分ですね」と言った。

「目っ！？」

取れてしまいそうな勢いで秋穂は首を横に振った。ハハハとミス

ターが笑みをこぼす。

「じゃあ、両目は可哀想ですから、片目だけいただきましょう。もう一箇所は……ふむ、耳はどうですか。結衣さんのときは、カイゼル君が一口で食べてしまいましたから」

「美味かったからな。だが、尻も捨てがたいぞ。俺たちは好奇心のせいで珍味に走りやすいが、美味さを追求するなら、やはり尻肉だろう」

「じゃあ、お尻にしましょうよ。アタシも食べたいわ。ねえ、料理長さん」

マダムが問いかける。

「お尻は一箇所？　二箇所で換算かしら」

「右の尻たぶ、なんて表現するときもありますね」

「一箇所で良いじゃん！　ね？　マリアも食べたいもん！」

「だそうだ。料理長、気前よく頼む」

結論が出た。眼球倶楽部の要望により、秋穂の尻肉は全て削がれることが決定した。

床の上を這いずり、もがいていた秋穂の頭を部下が押さえる。そのまま肩を固定し、足を固定する。うつ伏せになった秋穂は、ただただ彼らに従うしかない。

結衣が指定したのは、右脚、左脚、女性器、片目、臀部の計五箇所である。人を解体するのは思った以上に重労働のため、計画的に作業を進行しなければならない。

まず料理長が目をつけたのは、尻だった。

「秋穂さん。乳房もそうですが、尻もかなりの大きさですね。体力のあるうちに取りかかっておきたい。全員で一気に削いでいきまし

ょう」

聞き慣れた着信音が響き渡ったのはそのときだ。秋穂は咄嗟に思った。誠だ。

その勘は正しかったらしい。眼球倶楽部の面々が座る場所より少し離れたところに、秋穂と結衣の所持品が安置されていた。鳴り響く電子音。立ち上がったマリアが手に取り、画面を見て「誠」とだけ呟いて、ニイと八重歯を覗かせる。

「まことさん！　助けてっ！　殺されるっ！」

萎みきっていた心が、急速に膨らむかのようだ。秋穂はうつ伏せになったまま、四肢をばたつかせて必死に存在を主張した。結衣との浮気を知ってもなお、彼は秋穂にとって頼れる存在である。

動いたのは結衣だ。マリアからスマートフォンを受け取ると、床で暴れる秋穂の口を、閉じるよう部下たちにお願いした。黒いゴム手袋をつけた、大きな手のひらが秋穂の口を押さえる。酸素が取り込めなくなり、一気に頭が白んだ。

――秋穂？　全然、帰ってこんけど、どうした？

スピーカーポタンを押したのだろう。今朝聞いたはずの婚約者の声が、今となってはとても遠い存在に思える。秋穂は必死にもがき、声を張り上げようとした。だが――。

「ごめんいま、秋穂、トイレに行ってて」

――その声……結衣？　なして……、どうして秋穂と一緒にいるんだ。

誠は、広島訛りを標準語へと意識して変えた。結衣と会うときは『そう』なのだろう。

「帰る途中、ぐうぜん出会ったのよ。秋穂ったら、あたしの顔見た途端、すっごく喜んじゃってね。近況報告も兼ねて、二人で飲むことにしたの。ごめんね、婚約してから初めての誕生日なのに」

――秋穂が、そうしたい、っていうなら俺は構わないけど……。

鋭い痛みが、下半身を襲った。腰から尻にかけての境界線だ。緩やかな曲線を、直線へと変化させるように、一心不乱に秋穂の尻にナイフが突きつけられる。上から下へ、上から下へ。叫びたいのに、叫べない。部下の大きな手のひらの隙間から、わずかな酸素を取り込むのでやっとだ。料理長が嬉しそうに言った。牛でいう、ランプやイチボなわけですから、やはり尻はステーキでいただきましょう。

――なあ、結衣。その……なにか、企んでるわけじゃないよな？

「どういう意味？」

――俺と秋穂の関係を壊してやろう、とかそういうことだよ。俺は、結衣のことも大事だが、同じように秋穂のことも大事なんだ。最初に約束した通り、結婚の邪魔だけはやめて欲しい。それがお前に会うときの条件だったろ。

ずるい男ね、とマダムが笑った。結衣も、相手に聞こえないように鼻で笑った。

誠自身は結衣のわがままを聞いてやっている気でいるのかも知れない。しかし、好きなときに性欲を発散できる都合の良い女など、そう簡単に見つからないはずだ。深みにはまっているのはお互い様

だと結衣は気付いている。

「わかってるわ。あたしはそんなに物わかりの悪い女じゃないもの。でも……そうね、今日は多分、終電は逃しちゃうと思う。起きて待ってなくて良いよ、って秋穂からの伝言」

明らかな嘘だった。そのあと、たわいのない会話を二言三言繰り返し、結衣は終話ボタンを押す。また会おうね、の言葉も忘れずに。

結衣はスマートフォンを元の位置に戻すと、うつ伏せでぐったりと身を投げ出す秋穂を見下ろした。大きな曲線を描いていた尻は、いまや見る影もないほど肉が削げている。厨房ではさっそく切り分けた肉の調理が始まっていた。

良い気味、と結衣が笑う。

「さ、尻が終わりましたから、次は脚、いきましょうか」

間髪入れずに身体をひっくり返された。シャンデリアの光が、どっと秋穂の身体に降り注ぐ。遮るように、黒い服の人間たちが、上から秋穂を観察した。再び、身体が床に縫い止められる。

「まずは右脚から。先に足首を落としてしまいましょう」

料理長はサイドテーブルから肉包丁を手に取った。真っ直ぐに伸ばされた右脚、その足首に刃を沿わせると、勢いよく包丁を振り落とす。肉が裂け、一気に骨を打った。痺れが秋穂の身体を突き抜ける。料理長は全体重を包丁に乗せ、ゴリゴリと力で骨を断とうとする――が、上手く切れないようだ。

だめですね、と、白々しい素振りで小首を傾げた。

「やはり骨は硬い。すみません、奥から、ノコギリを持ってきてく

れませんか」

部下のひとりが急いで厨房へと走り、骨切り鋸を持って料理長の元へと舞い戻る。十八インチの洋鋸だ。部下たちが秋穂の足をしっかりと押さえつける。包丁でつけた切れ目に、料理長が鋸の刃を置いた。すぐに鈍い音がして、先ほどとは比にならないほどの痺れと痛みが秋穂を襲った。骨切り鋸は押し切りのため、ぐっと力を入れるのは刃を向こうへやるときである。そのたびに秋穂の全身が、陸に打ち上げられた魚さながら強制的に痙攣した。しかし、その苦痛はあっという間だった。

ゴロンと床に転がった右足首を持ち上げ、料理長が嬉しそうな声で「こちらは出汁取りに」と言う。骨切り鋸を部下に預け、肉包丁へと道具を持ち替える。

「太ももはミンチ肉にいたしましょう。人数分用意するには、結衣さんの左腕だけでは足りませんから」

秋穂に一切の暇を与えない。全てにおいて、料理長は手際が良かった。手にした肉包丁で、ザクザクと太ももの肉を削ぎ始める。もちろん、結衣の左腕に施したときのように太い血管と中心の骨を避ける方法だ。その肉は随時ミンチ機に投入され、ヌチヌチ、ネリネリとピンク色の粗挽き肉が端から溢れ出た。トレイの上に作られる鮮やかな山。

そうして太ももから足首までの肉を根こそぎ奪い去ると、再び道具を持ち替え、骨切り鋸で付け根から足の骨を断つ。この骨も出汁取りに使います。そんな料理長の声が、どこか遠くから聞こえてくるようだった。

「左脚も同じように処理しましょう。モタモタするわけにはいきません」

待って、とマダムの声が飛んだ。料理長はすでに、慣れた手つきで左脚の足首から下を骨切り鋸で落としていた。

「次は、茹でた肉をお願いできるかしら。今のところ焼き料理ばかりだから、さっぱりした感じで食べたいの」

「可能ですよ。しゃぶしゃぶ形式で提供しましょうか」

「待て、それなら俺も、太ももを輪切りにして欲しい。ステーキで頼む」

料理長は、加工した声で笑う。なんでも承ります、と言わんばかりだ。

「すぐに食べたいからそっちに行くわ。みんなも行きましょっ」

マダムの誘いによって、眼球倶楽部の面々はアクリル板を超え、料理長や秋穂たちのいるこちら側へと歩いてきた。

簡易コンロと鍋が、厨房から運び出されたときには、すでに左太ももがスライスされ始めていた。もちろん、根元はステーキ用に確保されている。

「あっあっあっ」

ピリピリと小刻みな痛みが連続して秋穂を襲う。本来なら肉用スライサーで切り分けるところを、料理長は自らの腕のみで均等な厚さに切り出す。

集った眼球倶楽部は、さっそく、できたての肉を熱湯にくぐらせ、各々しゃぶしゃぶに舌鼓を打ち始める。調味料は、ポン酢、ごまだれ、付け合わせの薬味にネギと生姜、紅葉おろしだ。

「ふむ。乳房のときに感じたような、ミルキーな味わいは全くありません。いかにも脚の肉。歯ごたえが、ふむ、強い」
「乳房はほとんどが脂肪だものね」
「俺はこういった食感のほうが好きだ、食い応えがある」

カイゼルはやはり初手は味付けなしのようだ。ポン酢に紅葉おろしのミスターに、少しずつ味を変えるマダム。マリアは全ての調味料を混ぜていた。

「美味しいーっ！　料理長っ、もっともっとっ」
「はい、ただいま」

全員が『食』そのものを楽しんでいる。和気藹々とした、とても雰囲気の良い空間だ。
そうして、秋穂の左脚が、どんどんすり減っていった。
やがて、ゴリゴリと鈍い音を立て、秋穂の骨が根元から約五センチのところで切り落とされる。しゃぶしゃぶ終了の合図である。料理長は、さらに残り五センチを丁寧に骨切り鋸でカットした。部下に手渡し「肉表面を切り揃えて、ソースはトリュフを使ったものを」と言付けして厨房へ向かわせる。
これで両方の脚が綺麗に切断されてしまった。

「美味しかったわ」「ちょっと休憩っ」「次はカイゼルさんの太ももステーキですね」「待ち遠しいな」

眼球倶楽部の面々は、自らの腹を撫でながら一息つこうとしていたが、先行していた『尻ステーキ』の焼き上がりを部下が知らせると、我先にと、アクリル板の向こうへと戻っていく。

床に放り出された秋穂は、恐る恐る、下半身に視線をやった。あ

るはずのものが、すっかりなくなった異様な光景だ。

――二本の足で立つことができなくなってしまった。

感傷に浸る時間も与えられず、焼きごてで根元に止血が施される。声も涙も涸れ果て、いっそのことひと思いに殺して欲しい、そんな気持ちすら、浮かび始めていた。

秋穂の股の間に座り込んだ料理長が、視線をその中心に向けながら呟く。

「処女だからでしょうか、小陰唇が大陰唇から伸びたりはみ出たりしていませんね」

まるで研究者のような淡々とした口ぶりだ。プニプニと指で秋穂の女性器をつつき、摘まんで内側を観察している。料理長の隣では、結衣が成り行きを見守っていた。いかにも、楽しくて仕方がないといった表情だ。

「色素も薄い。思えば、乳首も同じように薄桃色でしたから、これは生まれつきでしょう。どこから切るか、悩みますね」

マリアが立ち上がり、料理長に呼びかける。尻ステーキの油でべったりと濡れた唇。

「クリトリス切ったら、すぐにマリアにちょうだい！　飴玉みたいに、コロコロ舐めるのっ」

「わかりました。それでは、先にクリトリスを切りましょう」

黒いフェイスシールドに、秋穂の女性器が大写しになった。秋穂は、これから行われる凶行を察し、身をよじる。部下たちに固定さ

れた上半身、逃げられる余地は微塵もない。

「……洗浄したときにも思いましたが、分厚い包皮ですね。クリトリスがすっぽり隠れています。一番細い鉗子をください」

料理長は、先端が細く、小さくなった鉗子を右手で受け取った。そうして、左手の指で包皮を押さえつけると、グイと上に持ち上げるようにしてクリトリスを露出させる。やはり緊張からか、乳首のときと同じく、硬く勃起していた。

料理長は顔を近付け、充血したクリトリスを掴もうと鉗子を操る。しかし極小のそれは、体液をまといながらヌルヌルと逃げるように動いてしまった。追いかけるように鉗子の先がクリトリスの表面を撫でる。

ぴくり、と秋穂の腰が跳ねたのはそのときだ。

「あっ……はうっ……はっ……」

甘い、痺れるような感覚。ぷっくり膨らんだクリトリスの上を、金属の無機質な感覚が行き来する。そのたび、秋穂は尻を浮かせて痙攣した。

性的な行為に対して秋穂の身体は拒否反応を示すはずだった。だが、今はただ、強制的に快感が引きずり出されている。生命の危機を感じたゆえの繁殖本能からか、はたまた現実逃避か。

秋穂は理解していなかったが、彼女が拒否反応を示していたのは性的行為そのものではなく『愛情表現としてのセックス』のみである。根本的には自信のなさから由来するものであったが、秋穂にとってはその全てが『無理』だと脳にインプットされていた。

その点、料理長が与えた快感は、愛情など一欠片もない。一方的、かつ偶然の産物である。

悲しいかな、このとき秋穂は二十三年間生きてきて初めて、純粋

な快楽の存在を知ったのだ。

「んっ……ふっ……ふうっ……」

無意識ながら、秋穂は鉗子の先端を追いかけるようにして腰を動かし、クリトリスをそこに擦りつけた。鼻から抜ける甘い声。端から見れば、両脚を失った女が、奇妙なダンスを踊っているように見えただろう。現に結衣は、歯の隙間から笑い声を漏らしている。

積極的にクリトリスが寄ってきたおかげで、料理長はようやく秋穂のそれをつかまえることができた。

ふうと安堵の息をこぼしながら、鉗子を上げ、クリトリスの根元を露わにさせる。小さなメスを手に取り、小陰唇との境界に当て、ピンと弾くようにしてクリトリスを切った。

「ひっ」

秋穂の身体が、ひときわ大きく跳ねた。

これまで肉を削がれたときとは違う、脳天を貫くような痛みが一気に身体を駆け抜けたのである。最初で最後の快楽は終わった。秋穂は、一瞬で意識を飛ばしてしまった。

「マリアさん、お待たせしました。クリトリスです」

ぐったりとうなだれる秋穂を放置し、料理長は慎重な動作で、マリアの元へと歩み寄る。黒いゴム手袋の指先には、切除したばかりのそれが乗っていた。

「ふふっ、小さい。かわいい」

受け取ったマリアは、すぐに口の中へとクリトリスを放り込む。

舌の上に載せ、それを、眼球倶楽部の面々に見せつける。同系色かつ、そのサイズの小ささ、よく目をこらさないと認識できなかった。それでもマリアは満足したらしく、飴玉さながら、口を閉じて静かに舐め始める。

料理長は再び、秋穂の元へと舞い戻った。

「『本体』の切除に取りかかりましょう」

クリトリスの切除が終わったからとて、女性器の大部分はまだ残っているのだ。料理長は秋穂の股間の前で屈み、控えめな大陰唇をつまんで、めくった。血液で濡れた小陰唇が現れる。どこから切るか考えているらしい。

「……地続きの一枚肉になるよう、上から削いでいきましょうか。それを平たく伸ばして……カツレツに。ちなみに、カツレツと普通のカツの違いは、その調理法にありまして――」

蘊蓄をこぼしながら料理長は作業を進行していく。

その頃、尻ステーキを食べ終わったカイゼルは、間髪入れずに『輪切り太ももステーキ』を口に運んでいた。相変わらず静かな咀嚼音だ。薫り高いトリュフが使用されたソースは、肉付きの良い秋穂の太ももに良くマッチしているらしい。嬉しそうに口角が持ち上がっている。

「――簡単に言えば、油の量です。大量の油で一気にあげるのが通常のカツだとすれば、カツレツは使用する油の量が少なく、いわゆる揚げ焼きになります」

料理長は、サイドテーブルからメスを手に取り、へその下辺りから刃を沿わせた。部下たちは秋穂の身体をしっかり押さえ、起こる

であろう反動に備える。

「今回はミラノ風の味付けですから――」

ぷつり、と盛り上がった恥丘に切っ先が沈み込む。

「細かいパン粉にチーズを混ぜて、オリーブオイルとバターでカリッと仕上げていきます」

跳ねるように秋穂は意識を取り戻した。メスはすでに大陰唇の三分の一を切り離している。痛みというのは、どれだけ経験しても慣れるものではない。ましてや、それが自らの性器を傷つけていると思うとなおさらだ。秋穂は声を張り上げた。

構わず、メスが進められる。黒いフェイスシールドに飛ぶ、激しい返り血。

ふと、そのとき、メスの切っ先が失ったクリトリスの『跡地』を触った。正確には『剥き出しになった神経』に、だ。秋穂はピンと身体を張る。痛みと快楽が巨大な塊となって顔面を殴りつけるようだ。意識をそらすべく、歯を食いしばって耐えようとしたが、身体が勝手に跳ね回った。部下たちが秋穂の肌を押さえつけるギシギシという音が聞こえる。その力の攻防に、肌の至るところが内出血を起こしていた。

たった数分間で、料理長は作業を終わらせた。

切り取った女性器がそのままの形で銀トレイに置かれる。

肉が削げ、露出する切断面。そこへ、当然のように押し付けられる止血の焼きごて。秋穂は失神と快復を繰り返し、終着点として再び意識を手放した。

床に転がり、口から泡を吹く秋穂の身体を、料理長は両脚で跨ぐようにして立つ。

「これでようやく四箇所の切除が終わりました。五箇所目……残りは眼球ですね」

焼け爛れた平らな胸部の上に、腰を浮かせるようにして屈み込む。厨房では『まんこカツレツ』の調理が進んでいた。眼球倶楽部の面々に向けて、料理長が声を投げる。

「左右で味の違いはないと思いますが、希望はありますか。ないなら、右目を取ります」

誰からも異論の声はない。料理長は頷く。

黒いゴム手袋をはめた指が、静かに秋穂の右目に近付いた。

そうして、クリトリスの包皮を剥いたときのように左手で目蓋をめくると、現れた丸い眼球の隙間を狙って、ゆっくりと右手の中指を差し込んでいく。

眼球というものは、白目に触れられたときは痛くないが、黒目に触れると痛みを感じるようにできている。料理長は巧みに黒目を避けながら、ズブズブと指を沈めた。

半球を過ぎたころ、ようやく秋穂は意識を取り戻す。というよりかは、強制的に起こされた形だ。とてつもない圧迫感が、右目を襲っていた。料理長がなにをしようとしているのかは、これまでの経験から察することができる。だが、信じたくない気持ちのほうが大きい。秋穂は「嫌」と言った。料理長は、深く差し込んだ指を、円を描くように動かし始める。

――脳を、直接、かき混ぜられている。

秋穂はそう錯覚した。痛みと、恐怖が、ぐるぐる、ぐるぐる。それでいて指は、奥へ奥へと同時に侵入してくる。秋穂はただ「嫌」

とだけ繰り返し言った。悪あがきでも良い、少しでもこの苦痛が他の感情で塗り替えられるなら――。

料理長は指を引き抜いた。

「眼球を傷つけないように取り出したかったのですが……やはり指だけでは無理がありました。ハサミで切り出しましょう」

――失神したままでいられたらどれだけ良かったか。

秋穂にとっては、この眼球への扱いが、今までで一番、辛いものになった。

薄く、細いハサミを手にした料理長は、剥き出しになった眼球に切っ先を向けた。鋭利な先端が近付き、これまで指が入っていた隙間に差し入れられる。あまりの恐怖に身がすくみ、秋穂の身体は硬直した。厨房から漂う、揚げ湯とチーズの香り。

ジャキ、と金属が肉を断つ音が秋穂の身体中に響いた。

「結膜を切りました。その周辺の肉も切っていきます」

音が連続した。秋穂の目からは、枯れたとまで思った涙が血液と共にだらだら溢れ出す。考える余地すらない。ただただ、痛みと恐怖に支配されている。秋穂は料理長の黒いコックスーツの裾を掴んだ。そうしなければ、発狂してしまいそうだったからだ。ジャキジャキ、ジャキジャキ。ハサミを使えば、作業はかなり楽なものになったらしい。料理長は、ずるりと右の眼窩から秋穂の眼球を引き出した。まだ視神経が繋がったままである。躊躇いもなく、プツと切断した。

途端、秋穂の視界は半減した。

秋穂は、残った左目で、自身の身体から取り除かれた右目を見る。小さな球体。数秒前まで自分の身体に入っていたとは思えないほど、

オモチャじみた作りに感じられる。

「すみません、眼球をご希望されたのは、どなたでしたか。失念してしまいました」

料理長の問いかけに、ミスターが挙手する。

「マリア！　マリアがお目々ペロペロする！」

しかしそれを遮ったのはマリアである。到着した『揚げたてまんこカツレツ』に目を輝かせていたマダムが、気もそぞろな様子で彼女のわがままをいさめる。

「だめでしょ、マリアちゃん。まだ口の中にクリトリスが残ってるじゃない」

「マダムにあげるっ」

マリアは舐めしゃぶっていたクリトリスを舌に載せ、黒い口紅を塗ったマダムの口を割って奥へと押し込んだ。

その足で料理長の元へと舞い戻り、秋穂の右眼球を奪い去るように唇で食む。ミスターの元へと舞い戻り、不満を述べようとしていた口に直接、運び届けた。いたずらっぽい笑みを浮かべ、そうしてマリアは、相手の口内に移動した眼球を、舌で追いかけ始める。ぬちゅぬちゅと卑猥な音が響いた。ミスターは満更ではない様子でマリアの腰に手を回し、眼球の弾力を楽しんでいる。

一方、マダムも満更ではないようだ。マリアから受け取ったクリトリスを、トッピングさながら切り分けたカツレツと一緒に噛みしめ始める。カイゼルはといえば、同じくカツレツを食べるのに忙しいようだ。

「陰毛の根元が残っていて若干ジャリジャリする。俺はパイパン女のほうが好みだ」
「あら、アタシはこの食感好きよ。プリプリした弾力に、ほんの少しのスパイス的な」
「カツレツの調理法に助けられてるんだ。美味いのは衣。チーズが美味いんだよ、これは」

など、それぞれが有意義な時間を過ごしている。
秋穂は出がらしのように、誰からも注視されなくなった。冷たい床を、皮膚の削げた両腕で這い這い、なにをするでもなく、浮かび始めた思考を、そのままにする。
現時点で、完全に欠損したのは、左手の小指、右目、両乳房、尻、女性器、両脚――。
そもそも、どうして、こんな惨劇の舞台の上に載せられてしまったのだろうか。
料理長は第一声でこう言っていた。

――あなたは監禁されています。なにか、心当たりはございませんか。

秋穂にはなにひとつ心当たりはなかった。過去、現在に至るまで、誰からも恨まれるようなことがないと思ったからだ。だが、親友だと信じていた志摩結衣から、身代わりに指名されるほどの恨みを買っていた。
秋穂自身は気付いていないだけで、他にも憎悪を向けられていた可能性がある。

「ごめんなさい」

秋穂はこちらを見下ろしてくる結衣に向かって、謝罪の言葉を投

げかけた。

「謝らなくて良いから、さっさと死んで」

結衣は、骨がほとんど剥き出しになった左腕から、欠損した手のひらをぶらぶらさせて微笑んだ。鮮血が垂れ落ちる、かつて五指が揃っていた右手。ずいぶん前に食われたらしい右耳の跡地は、血が固まって黒々としていた。

「秋穂さん、いつでも言ってくださいね。手伝います」

料理長が、のんきな様子で切断機を秋穂の目の前まで押して寄越す。鼻っ面に無機質な機械が押し当てられ、秋穂は動くのを止めた。気力が一気に削げたのである。停滞の空気がはびこった。

痺れを切らした結衣が「ねえ」と声を張り上げる。

「これってもう、あたしの勝ちでしょ？　秋穂、死んだも同然じゃん」

なじるような口調だ。料理長が首を横に振った。

「供物ゲームは『餞』か『贄』を選ぶことで勝敗が決まります。止血が追いつかず、出血多量で死んでしまった場合のみ、生き残ったほうが勝者――」

ですから結衣さんはまだ食材候補ですね。そう、言葉を重ねる。料理長たちによる止血は、方法はさておき効果は十分であった。秋穂がこのまま、無気力に床に転がり続けても、しばらくは死なないだろう。となれば、やはりゲームを続行するしかない。

結衣は凄まじい形相で秋穂を睨み付けた。どちらかが肉を捧げな

い限り、ゲームは進展しないのだ。

――どうすればいいの。

秋穂は、散漫な思考をなんとか束ねようとした。

両脚が使えなくなった今、立ち上がることすら不可能だ。しかし、料理長に頼めば、部下たちを使って秋穂の身体を切断機まで動かしてくれるだろう。そのまま、どちらかの腕を突っ込み、一回分の指定権を得れば――結衣の脚を奪うことができる。だが、その方法では、一箇所――片足しか切断できない。両脚を奪うには、両方の腕を捧げる必要がある。二箇所――二箇所を捧げる労力――いや、どうして腕を切り落とそうとしているのか――捧げるのは指の先端でも良いのだから、それこそ何本か指を落とせば――。

――いっそのこと『餞』を狙ったほうが良いのではないだろうか。

「まだ待たなきゃいけないのかしら、料理長さん」

出された料理を全て胃に収めたマダムが、焦れた様子で口を挟んだ。ミスターが酒で口を湿らせながら「健啖家の我々には、いささか足りない食事ですね」と続ける。

「この間は三人いたし、ペースも早かった。今日はすごく焦らされてる気分だわ」

「煮込み料理に時間がかかるってのもあるな」

慌てた様子で、料理長が自ら厨房に走った。

「カフェモカのおかわりをご用意いたしましょう」

そうして人数分のカップにカフェモカを注いで帰ってきたが、眼球倶楽部の面々は、いつにも増してそれを断った。お客様のご機嫌取りに失敗し、持てあました四つのカップを、料理長はトレイごと秋穂の前に置く。

「良かったら、どうぞ、美味しいですよ」

湯気が立ち上っている。全くもって飲む気にはなれないが、甘い香りが秋穂の鼻先をくすぐった。

はあ、と息がこぼれる。

死んだ親友たちとの思い出が、ゆらゆらと、蜃気楼のように蘇ってきた。

大学時代はよく、秋穂を含めて五人――志摩結衣、北島美羽、鏑木夏実、大野友加里――で色々な場所に行った。地方から越してきた秋穂たちは大阪のことをなにも知らず、唯一、地元民である美羽に案内される形で古き良き街を回ったのだ。お洒落なバーもあれば、いかにもといった風情の飲み屋もある。だが、どこに行っても楽しかった。たわいもない冗談を言い合い、ときには慣れない大阪弁を喋ったりして――思い起こせば、運動好きの友加里に付き合い、ラクロスを楽しんだ日や、派手な見た目の夏実に合わせて、全員で金髪に染めた日も――。

――本当に、楽しかった……楽しかったのに……。

「さっさと死ね！　くたばれ！」

結衣の暴言が頭上から降り注ぐ。

現状に気を揉んでいるらしい。結衣の考えは手に取るようにわかる。できることなら秋穂に行動をさせ、それを起爆剤に状況を動かしたい。自分の身体を捧げずに済むなら、それに越したことはない

――。秋穂自身も同じ気持ちだ。同じだからこそ、秋穂は緩やかに思考を押し進めた。内心では、結衣を出し抜きたい気持ちがムクムクと込み上げている。

――結衣は、私の『両脚』や『女性器』を指定しても『贄』にはならなかった。それ以上にレアリティーの高いところなんて……。

電撃のようなものが秋穂の身体を走った。

どうして今まで、思い至らなかったのだろう。

彼ら眼球倶楽部は、自らの会を紹介するときに『性と食を追求した会』だと言った。それと同時に『性には飽き、食へと興味が移行した』とも。つまり性的な箇所は『餞』にも『贄』にも該当しない。そもそも、その二つの要素が別々の箇所を差しているとは一言も言っていないのだ。もし、餞も贄も同じ箇所を指しているのだとすれば――。

「切ったら、ちゃんと、止血してもらえますか」

秋穂は料理長を見上げて言った。

「ええ、もちろんです。手助けが必要ですか」

頷いた。すると、部下たちが秋穂の脇に手を差し入れ、グイと身体を起こした。結衣は、秋穂の考えを探るような視線を投げかけている。

相変わらず、甲高い音を立てて丸ノコは高速回転している。そこへ、秋穂は顔を近付けていく。

「はあっ……はあっ……」

覚悟を決めていても、爆発してしまいそうなほど心臓が高鳴っていた。

ヌッ、と舌を差し出す。

シャンデリアの光を吸い、新種の生き物のように、唾液をまとった舌が踊る。秋穂は、料理長に目配せをし、五指がまだ残る右手で鉗子を受け取った。逃げまとう舌をそれで挟み込むと、力いっぱい腕を伸ばし、限界まで根元を露出させる。

気付けば、眼球倶楽部の面々が、すぐそばまで近付いていた。みな、秋穂が舌を切断するのを今か今かと待ち望んでいる。

そうして――。

おびただしい量の返り血が、全員の顔を汚したとき。

盛大な拍手が、部屋中を喝采のムードで包んだのである。

「ようやく勝者が決まりました、秋穂さん。そして、食材になるべき人間も」

料理長の指示によって、切断した舌の根元に熱した焼きごてが押し付けられた。秋穂は当然、激しく痙攣し、白目を剥いて失神する。眼球倶楽部の面々が、その身体をうやうやしい仕草でアクリル板の向こうへと運んでいく。

結衣が泣き叫ぶ声が部屋中に反響した。敗者の身体が、力いっぱい押さえつけられる。

「いやっ！　死にたくないっ！　死にたくないぃっ」

響くのは、モーター音。まずは頭の剃毛である。部下は用意したバリカンを結衣の頭部に沿わせると、それを巧みに操り、染色した髪の毛を落とした。すぐに失った右耳が露わになり、凄まじい形相がまざまざと露見する。坊主になった結衣は、スレンダーな見た目も相まって粗末なマッチ棒のようだ。

「ゆるしてえええっゆるしてよぉおおおっ」

しかし、準備は粛々と進められていく。

その間、眼球倶楽部の面々は、中央に用意した秋穂専用の椅子に、失神したままのアンバランスな身体を、どう乗せるべきか相談し合っていた。

結衣の頭上に、バケツが掲げられる。中には液体が入っているらしい。

「自家製のタレです。砂糖と醤油、みりんに、臭み消しの酒、生姜」

バケツが傾けられ、頭頂から一気にぶちまけられた。赤茶色の液体。甘ったるいような、酸っぱいような香りが辺りに広がった。部下たちは、身体の隅々に至るまで入念にそれを塗り込んでいく。

料理長は、次に使う用具の指示を部下たちに出しながら、結衣に語りかける。

「本来、味付けは最小限で、内臓を取り出し、ぽっかり空いた内部に塩とハーブを詰めるのですが、今回は生きたまま焼いてくれとのご要望のため、あえて表面の味を濃くしました。たくさん塗り込んでも、焼けば油と一緒に流れていきますから、ちょうど良い塩梅になることでしょう」

用意されたのは、鉄製の細長い棒だ。一番長いもので約二メート

ルほどだろうか。結衣の背中に一本通すと、それを縦軸に、横のラインを短い棒で形成していく。手足を縛り付けると、簡単に身体が大の字で固定された。そこに登場したのが針金である。

「油が落ちると、棒から身体が脱落してしまう可能性があるのです。食い込んで血が出ても構いませんから、しっかりと巻き付け、固定するのがコツです」

皮膚が裂けるのもおかまいなしに、針金がグルグルと細部に巻き付けられた。きつく締め上げるほど、背中が反る形で固定され、ツンと上向きに乳房が立ち上がる。初めは暴れていた結衣だったが、動けば動くほど肉に食い込む針金に、今や息も絶え絶えだ。

「あ、秋穂。おはよー」

意識を取り戻した秋穂は、視界いっぱいに広がるマリアの顔に驚き、仰け反った。その勢いで椅子からずり落ち、削ぎ落とされた尻をしたたか打つ。痛みで顔を歪めていると、マダムが笑いながら秋穂の身体を引き起こした。

「あなたは勝ったのよ、もう痛い思いしなくて良いの」

秋穂はキョロキョロと左右を見渡した。眼球倶楽部の四人が、口元に笑みを浮かべている。まるで愛玩人形を扱うかのように、丁寧な仕草で椅子に戻される。秋穂は視線を下へ向けた。黒いレースが下半身を覆っている。どうやら、意識を失っている間に、マダムやマリアと同じようなドレスに着替えさせられたらしい。

「似合ってるよ、秋穂。マリアたちと一緒に、ご馳走食べようね」

うっとりとした様子で、彼らは秋穂を取り囲んだ。

――本当に、勝ったんだ。私、生き残ることができたんだ。

「あかり！　たすけてっ！」

途端、ビリビリと張りつめた声が鼓膜を打った。見ると、棒に固定された結衣が、厨房へと運ばれていく最中である。

秋穂は「どうして？」と問いかけたつもりだが、舌を失ったせいで、ほとんど赤子の喃語のようである。それでも言わずにいられなかった。

――どうして、あんたなんかを、助ける必要があるの？

心の底から湧き出た、純粋な問いかけだ。秋穂はゆっくりと、厨房の奥へと消えていく、かつての親友の姿を見送った。厨房の奥には、壁一面を埋めるような、巨大なガラスオーブンがある。

「これ、食べてみてちょうだい」

マダムに話しかけられ、秋穂は視線をそちらに移した。手のひらサイズの椀に、野菜と肉がゴロゴロ入っている。醤油などで味付けした、和風煮込みだろうか。マダムはおもむろにそれを箸で摘まみ、秋穂の口に寄越した。

「アーンして、秋穂ちゃん」

口を開きたくなかった。だが、彼らの機嫌を損ねて、せっかく掴み取った勝利をなかったことにされるのだけは避けたい。生理的な嫌悪や、心理的な葛藤はあったが、秋穂は恐る恐る口を開いた。

舌の上に、肉が載る。

「ほら、早く。顎を動かして、しっかり噛みしめるの」

言われるがまま、そうした。

ぎゅっぎゅっ、と肉を奥歯で噛みしめるたび、油が染み出て、口内を侵食する。味自体は、なんの変哲もない煮込みだが、肉質はほとんど脂肪で、それでいてやけに繊維を感じさせる。鶏豚牛とは違う、独特の臭みもあった。日常の食卓に出すには癖の強い味わいだ。秋穂は、これ以上噛んでいるのが嫌で、ごくりと飲み込んだ。マダムが「今のは秋穂ちゃんの右乳房よ」と微笑む。

「シュラスコは美味しかったけど、煮込みはあんまりね。乳房とか、脂肪の多い部分はやっぱり、カリカリに焼き上げてしまうのが一番美味しい気がするわ」

秋穂は、愛想笑いを浮かべた。どう反応して良いかわからなかったのだ。すると今度は、ミスターが話しかけてくる。

「タンが焼けたそうですよ。塩とレモン、秋穂さんはどうされますか」

彼のいう『タン』は、どう考えても秋穂が先ほど捧げた舌だろう。自分の身体から切断し、二度と戻ってこない肉に対する味付けを聞かれても、返答に困るだけだ。秋穂はまた、愛想笑いを返した。ミスターはそれをどうとらえたのか「わたしのお勧めは塩のみです」と、肉の載った小皿を片手に近付いてくる。

秋穂は再び、自らの肉を、他人の手ずから食べることになった。

タンは薄くスライスされ、赤茶色にこんがり焼かれている。秋穂は、乳房のときと同じように奥歯で噛みしめた。するとどうだろう。

明らかに、乳房よりも食べられる食感である。歯ごたえも良く、鼻に抜ける、香ばしい味わいが食欲を大いに刺激した。

動きの鈍かった秋穂の顎が、自然に上下する。

様子を敏感に察知したカイゼルが「俺のもやろう。上タンだぞ」と塩にレモンを足したそれを彼女に食べさせる。

――なるほど。食感が違う。それに合わせて、つけダレを変えたのね。

脂肪の多い上タンの場合は、塩に柑橘を足すと、嫌味なくさっぱりと食べられることを秋穂は知った。ミスターに渡されたものよりも、こちらのほうがふんわりした歯ごたえで、上タンと並タンの違いを簡単に感じられる。

秋穂は、頷きながら顎を動かし続けた。

眼球倶楽部の面々は、そんな秋穂の反応が楽しいのか、テーブルに並んだ料理を次々に箸で与え始める。

舌のない秋穂は抵抗の言葉を知らない。溺れるような様子で、ヘラヘラと愛想笑いを浮かべながら、自らの肉を食らい続けた。

結衣の悲鳴が消えたのはそのときだ。

秋穂はチラと厨房の奥に視線をやった。巨大なガラスオーブンの中で、四肢を大の字に固定された結衣が、タレまみれのまま必死の形相を浮かべているのが見える。どうやら、すでに火はつけられているらしい。身体の表面を高温の熱がジワジワと舐め、遠くに座る秋穂のところまで、香ばしい匂いが漂っていた。

秋穂は、顔中を、押し付けられた料理の油でベタベタにしながら、婚約者のことを思った。

――誠さん。いま、なにしてるの。

――誠さん……。

――私、誠さんに会いたい……。

彼は、秋穂という婚約者がいながら結衣との不貞を行った。それは消せない事実だ。しかし、それでも秋穂の心は確かに誠を求めている。

思えば、婚約してからも恋人というよりは兄妹のような関係であった。性的な接触がなく、彼がひとつ年上ということもあって、誠を慕うだけの間柄になっていたのだ。それがいけなかった。誠にだって弱い部分はある、欲求だってある。どちらかが相手に寄りかかる形では、良い関係を築いていくことは難しい。

――私は、誠さんと、結婚もしたいし、セックスもしたい。子供だって欲しい。

秋穂は思った。誠にとっては『実家のある広島についてきてくれる』『おっぱいが大きい女』という打算的な条件があったのだとしても、彼と一緒に過ごす時間は、なによりも暖かく、幸せだった。

――今になって、どんどん、したいことが溢れてくる……。

――違う、こうして生き残ったからこそ、溢れてくるんだ……。

皮肉にも、結衣という闖入者と、供物ゲームという惨劇のおかげで、誠に対する気持ちを再確認した。

――いっそのこと、仕事を辞めて、家庭に入ってみようか。

残業続きの今の仕事では、二人で過ごす時間は限られてくる。今後は意識して、誠との時間を作っていけば、心の距離も縮まって、セックスまで踏み込むことができるかも知れない。なにせ、クリト

リスを切除されるとき、秋穂は確かな快感を感じた。この身体は、快楽を知るようにできていて――。

「お待たせしました。結衣さんの左腕と、秋穂さんの右脚。二人の肉を合挽にして作った、グリルハンバーグです」

鉄板、熱くなってますから気をつけてくださいね。そう言って、シェフは秋穂の目の前にドンとそれを置いた。いまグリルから出してきたばかりといったように大きく湯気が立ちのぼり、顔面を無遠慮に撫でる。秋穂は咳き込んだ。背後から現れたのはカイゼルだ。

「俺が切り分けてやろう」

そうしてカイゼルはハンバーグにナイフを差し入れた。ジュワと肉汁が溢れ出し、熱した鉄板の上で豪快に跳ねる。誠への恋慕は、口に押し込まれた熱々の合挽肉で上書きされてしまった。ハフハフと息を吐き、秋穂は慌てて咀嚼する。

噛みしめるたびに新たな肉汁が溢れ出た。やや荒く挽いた肉。鼻に抜ける味わいにはジビエ肉のような独特の香りがある。だが、しっかりと味付けされ、臭みの処理が施されたそれは、普段、秋穂が口にしているような動物肉とそう変わらなかった。むしろ、人肉と伝えられなければ、誰もが美味しく食べられるはずだ。

その事実が、秋穂の涙を誘った。

「うっ……ううっ……」

どうして泣けてくるのかわからない。だが、無性に悲しみが込み上げてくる。

これまで頑張って生きてきたつもりだった。二十三年間、人を故

意に傷つけるようなことをした覚えもない。それなのに、自分と、かつて親友だった結衣の肉を、挽いて、合わせて、揉み込んで、しっかり焼き上げたハンバーグを食わされている。

「美味いだろう、ほら、もっと食え」

秋穂はだらだらと涙をこぼしながら、口に運ばれ続けるそれを噛んで、飲み込んだ。料理長は秋穂の涙を嬉し涙と判断したのか「ハンバーグには自信があるんです」とご満悦だ。そういえば昔、と話し始め――。

「昔、大阪にいたとき、あんたに作ったったな」

秋穂の口から、ポロリと肉片が落ちる。今、声が――。

「んもう、こぼしちゃって」

マリアが唇を尖らせ、秋穂が落としたそれをフォークで刺して食べた。

幻聴だろうか。秋穂は、視線を左右に振り、声の正体を探す。だが、それらしき人物はどこにもいない。

「実家からでかい肉送られてきてな、一人じゃ食い切れんゆうて、秋穂ら誘って振る舞ったん覚えてへんか」

目を見開いた。

「ミンチ機なくてぜんぶ手ぇでやってな、あんときの苦労が、今に繋がっとんねん」

確かにそれは、北島美羽（みう）の声だった。秋穂は咄嗟に、マダムの顔を見る。そして、マリア、ミスター、カイゼルの顔を。

そのとき、眼球倶楽部の面々が大声で笑った。我慢できない、といった様子で、中には、腹を抱えている者もいる。

「やっぱりバカね、頭の栄養が全部おっぱいにいっちゃったんだわ」

「ははっ、今となっては、ぜんぶわたしたちの胃の中だ」

秋穂は混乱した。「美羽は死んだんじゃないの」と言いたかった。赤子の喃語さながら、必死に問いかける。

すると、料理長がおもむろに例の記念写真を取り出した。

北島美羽、鏑木夏実、大野友加里、計三人の死体と、四人の眼球倶楽部の面々が映った写真だ。料理長は「私はこのとき、カメラマンをしていたと伝えましたね」と言う。その声色は、低く加工されたものではない。どう考えても、美羽のものだった。

「こんとき、あたしは殺した二人に挟まっててん。シャッターは自動」

ようやく、料理長がボイスチェンジャーを切ったことに思い至った。それでも、まだ、生きている頃の美羽の音声を録音して、フェイスシールドの下から再生しているだけの可能性を考えた。

秋穂は、黒いプラスチックのフェイスシールドを睨み付ける。

料理長の正体はきっと、秋穂がこの二十三年間で一度も出会ったことのないような、精神異常者であるはずだ。他人が苦しむのを見て喜ぶ、生粋のサディスト。愉快犯。だから決して、ユーモアに溢れ、人を笑わせることが大の得意であった北島美羽ではない。

だが、もし美羽なら――。

明るいばかりの思い出が、暗くよどんだ色を帯び始めてしまう――。

「ええで、もう隠す必要ないし」

料理長はそうして、必要ないとばかりに、顔面を覆うそれを取っ払った。

現れたのは、金髪のショートカット。切れ長の瞳。正真正銘、北島美羽である。大学の四年間を共に過ごした。秋穂がその顔を見間違えるはずがない。

――どうして？

悲しい気持ちで、胸がいっぱいになる。

美羽は、眼球倶楽部が使っていた椅子に腰を下ろすと、誰も口をつけずに放置されたカフェモカのカップを取った。ゆったりとした様子で、冷めきったそれを静かに飲み始める。

やっぱ美味いな、と美羽が呟く。

「五人で喫茶店行ったとき、いーっつもあたし、カフェモカ頼んでた。秋穂に『なんで？』聞かれて『味が好きやねん』てなんべんも答えたわ。でも、あんたは結局、今になってもそれを思い出さん。自分のことしか考えてへんねな」

美羽は目を細める。なぜか、その表情は嬉しそうにさえ見えた。

「誠は、そういうあんたの抜けたところが好きやったんかも知れん」

空になったカップを机の上に置き、まだ三つ残る冷めたカフェモカに視線を落としながら微笑む。沈黙の時間が続いた。それを破ったのは美羽だ。

「――結衣、まだ生きとんな」

つられて秋穂も、そちらに目をやった。巨大なガラスオーブンの中では、大の字になった結衣がゆっくりと横に回転している。焼きムラがでないように行われているのだが、その顔が秋穂たちのほうに向くたびに、熱にあえぐ結衣の表情が現れるのだった。

悲鳴をあげる気力は微塵も残っていないらしく、舌をだらんと垂らし、あとはジワジワ死んでいくだけ、といった生き地獄の様相である。

「小さめの豚でも五時間以上はかかる。人間様やと十時間以上、ああする必要があるな」

見ながら、美羽は会話を続けた。

「結衣は、誠があんたを選んだ理由を、実家のある広島についてきてくれて、おっぱいがでかい子ぉやったからゆうてたけど、あれ、違うで」

秋穂は美羽の横顔を見る。

「ほんまの理由はあんたが処女やからや」

――どういう意味？

秋穂は小首を傾げた。

左右で聞いていた眼球倶楽部の面々が、秋穂の両足首と脚の骨で取ったスープを飲み始めた。

もちろん、秋穂の口にもお裾分けされる。さじに取った薄い黄金色の液体。それを勧められるがまま、ズズズと音を鳴らして口に含

む。

瞬間、甘美な味わいが広がった。

豚足なら、コラーゲンが出て、全体的にこってりした風味になるが、人間の足は、どちらかといえば鶏足の味わいに近い。あっさりとしていて、やや甘みが感じられる。秋穂は、二口目を飲んだ。ハンバーグで油っぽくなっていた口内を洗い流すように、足首スープがサラサラと胃へ落ちていく。

「あたし、子供、二回堕ろしてるんよ」

あまりにも何気ない様子で言うものだから、聞き流してしまいそうになる。秋穂は美羽に視線を戻した。

妊娠経験もさることながら、二度の堕胎は、初耳だ。

四年間一緒に過ごしてきたが、そうした素振りは少しも感じなかった。思えば、美羽の口からは『気になるひとができた』としか聞いたことがない。彼氏も長らくいないはず――。

三口目のスープが秋穂の口元に近付けられる。秋穂は口を開きながら考えた。

――いつ、堕胎して、相手は誰なのか。

先を促す視線を送る。察したのか、美羽は言葉を続けた。

「医者には、もう子供、望めんかも知れんて言われた。それでも根気よう頑張ったら、ちゃんと欲しいときに授かれる……相手には、そう説明したんよ。でも、フラれてしもた。子供が作れへんのは困る、ゆうてな。それなら在学中は避妊してくれたらええんに、自分勝手な男やで」

美羽は、秋穂の顔を覗き込む。

「なんやピンときてへん顔やな」

そうして笑いながら「全部、あたしと誠の話や」と補足する。

秋穂の胃が、ビクリと跳ねた。

「あんたも結衣も、鈍すぎる。誠、夏実と友加里ともヤっとったんやで。あたしら五人、竿姉妹。なんやゆうたら五人で収まらん。大学んなか、誠のちんぽに貫かれた女ばっかりや。ふふっ、中出しさせたるから他の女、切れゆうてもゆうこと聞かんかった」

――誠は、結衣とも関係があって、夏実と、友加里とも……美羽は、子供を、二回、堕ろして……。

秋穂はようやく、美羽の発言を理解した。同時に、とてつもない嫌悪が込み上げた。

「おえええええっ」

ビシャビシャと派手な音を立てて秋穂の口から吐瀉物が流れ出る。隣に座っていたマリアが、嬉しそうに銀ボウルでそれを受けた。吐いても吐いても不快な感情は吐き出しきれない。胃が激しく痙攣し、秋穂は涙を流して嘔吐を続けた。

「二十二年間、連れ添った肉が、ただのゲロになってしもたな」

ちゃうか、今日で二十三年間か、誕生日おめでとうなあ。

美羽は白々しい口調で、吐き続ける秋穂を祝った。マダムに背中を撫でられ、やがて秋穂は空の鳴咽を出すだけになる。たっぷりと人肉ゲロの溜まった銀ボウルを、マリアが両手で抱えてゴクゴクと

飲み始めた。実に豪快な飲みっぷりだ。

「なあ、秋穂。あたしはな、最初から、あんたら全員殺すつもりやった。全員ゆうんは、これまで誠とセックスした女と……」

全身を黒で固めた美羽は、金色の髪の毛を揺らしながら秋穂の顔を覗き込む。

「これから誠とセックスする女」

夏実と友加里が殺された理由は、誠と肌を重ねたから、というわけだ。ガラスオーブンの中でぐるぐる回りながら焼かれている結衣も同じ理由だろう。

思えば『供物ゲーム』の説明をするとき、料理長、もとい美羽はこう言っていた。

『逆指名した場合の特別ルールですね。ただ食材にするだけではつまらない、とのことで、エンターテイメント性を追加することにしました。これは私の案ではなく、眼球倶楽部、みなさんのご要望です』

そう、初めから『供物ゲーム』は眼球倶楽部のために行われた娯楽であった。美羽自身の目的はずっと、誠に関わる女を全員殺すこと。言ってしまえば、ゲームのルールなど、どうだってよかったのだ。餞だの、贄だのは、場を盛り上げるためだけの要素でしかない。

「最高の娯楽を提供する代わりに、あたしの殺しを手伝って欲しい。ぜったい退屈させへん、ゆうて誘ったら、みんなノってくれてん」

眼球倶楽部の面々が大きく頷いた。

「なにもかもに飽き飽きしていましたからね」
「ふふっ、美羽ちゃん、命拾いしたわね。だって、」
「つまらなかったら、美羽をバラして楽しもうって決めてたんだ。だが、」
「マリア、いま、すっごく楽しいのっ！　ヒト食べるのって楽しいっ！」

四人がアハハと笑い合う。美羽は、冷め切ったカフェラテのカップを取った。

「せやから、そもそもが勝ち負けの問題やない。残念やったな、秋穂」

秋穂は椅子から転げ落ちた。全身が震え、それでも逃げだそうと、失った両脚で床を掻き、両手をばたつかせる。
全員が立ち上がり、秋穂の反応を楽しそうに見下ろした。
秋穂は必死で叫んだ。舌を失ってもなお、誰かにこの声を聞きとめて欲しかった。しかし、見上げたガラスオーブンの中では、高温でなぶられ続けた結衣が、うつろな視線を寄越すだけだ。着せられた黒いドレスが泥のように身体にまとわりつく。秋穂は床をのたうちまわる。
お願いだから、誰でも良いから、私を、私を――。
視界に割り込むようにして、黒い靴が五足、並んだ。

「安心しい、骨までしゃぶったる。ほんで、ぜーんぶクソにして、便所にひりだしたるわ」

美羽はカップを傾けた。

咄嗟に目をつむる。
顔面を蹂躙する冷たいカフェモカ。次に目を開けたときには、悪い夢から覚めることを願って。

了

（後書き）

ここまで読んでくださってありがとうございます。
ご依頼はこちらｈｔｔｐｓ：／／ｔｏｄｏｒｏｋｉｍｅｇｕｒｕ．ｊｉｍｄｏｆｒｅｅ．ｃｏｍ／からお願いします。

この作品の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
https://novel18.syosetu.com/n1390go/

贖罪生誕祭／Ｒ１８Ｇ男性向けカニバリズム

2024年6月2日19時15分発行